

---

# 兄妹 ~ 紡グ言ノ葉 ~

八神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

兄妹 ～ 紡グ言ノ葉 ～

### 【Nコード】

N7829S

### 【作者名】

八神

### 【あらすじ】

高校生活最後の夏休み。とても暑い日だった。

高校入学当初から付き合っていた智瀬ちせは俺に微笑んだ。

「久しぶりのデートだね」と。

「ああ、そうだな」 その笑顔は本当に喜びで満ちていた。

同時に、陰で夏美は「お兄ちゃんの為なら、なんでもするよ」と笑う。

そして、狂うまで。 見つめる瞳に気づかない。

気持ち、そして涙さえも。

受け入れ、後悔して、泣き、叫び。

加速していく、三人の歯車。 噛み合う事ないと知った時。

少女は、何を思うのか。 そして、少年のする選択は

## 序章 く夏美く

うぐ…あう……。 おいてかないで……

初めて見た夏美なつみの表情は泣き顔だった。

【8月3日】

「あちい……」

ジリジリと暑い。

真夏なのは分かるがこの暑さはやばい。

テレビでやっていた今朝の天気予報だと30 を越えるとか言っていた。

あづい…暑すぎる…、、、

自分の腕を見ると汗でテカっていた。

「お兄ちゃん!! もう遅いよ!!」

汗ひとつかかずに、俺の前をスキップしながら早くしろと催促する。

お兄ちゃんこと 俺、鷺原さぎはら 聡さとしは高校生活最後の夏休み返上して

このお気楽娘。

妹の夏美の買い物に付き合ってきている。

俺の住む凧名町なぎなちようは割と田舎の方で買い物はいつも電車で5区間乗り  
継いだ

柏市町<sup>かしわしまち</sup>まで行っている。

今も柏市町に来ているのだが…

「夏美い…」 俺は前をルンルン歩く夏美に情けない声をかける。

「ん？ なぁに？」 振り返らずに夏美は相づちを打つ。

「まだ買うのか…？」

両手に抱えきれない程にかさばった紙袋を掲げながら言った。

紙袋の中には洋服やら小物やら男の俺には何に使うのか分からない物が詰められていた。

「まだまだだよっ お兄ちゃん頑張って！」

荷物持ちを引き受けなきゃ良かったと思いつつ溜め息をつく。

思えば、今年の春。

夏美が高校受験に合格したとかで、柏市町に住んでいたのにわざわざ田舎の俺の家に住むとか言っって押し掛けてきた事から始まったんだと思う。

俺と夏美は昔一緒に住んでいた。

でも俺が小学6年の時、両親が離婚。

俺はお母さんに、夏美はお父さんにそれぞれ分かれて引き取られた。

それから3年間、俺と夏美は会う事はなかったのだが。

何を思ったのか、夏美は都会の柏市高校ではなく田舎で

俺の通っている華李<sup>かりき</sup>早高校を受験。  
見事に合格してみせた。

柏市町から通うのが大変だと言うので俺の家にお世話になりますと  
いきなり押し掛けてきたのが入学式の二日前の事。

…それ以来夏美と俺は一緒に学校に通っている。

話を戻して今日。

俺は夏美にせがまれて買い物に付き合っているわけだが。

こんなに暑いと、こんなに荷物があるとは思わなかったから。

今は軽く地獄をみている。後悔してると言ってもいいかもしれない。

「  
」

夏美はやけに楽しそうに鼻歌をもらしている。

「なんか楽しそうだな」

俺は息絶え絶えに問う。

「だって」 夏美は太陽みたく眩しい笑顔を見せた。

「お兄ちゃんと買い物なんて、久しぶりなんだもん」

ジリジリと暑い真夏の最中、止まっていたはずの

俺と夏美の歯車は、鈍い音をたてながら動き始めていた。

## 1章Aパート

【8月4日】

ふああ… 俺は欠伸を一つ。

眠い。結局昨日は夜まで夏美の買い物に付き合っ羽目になった。柏市町で食事を済ませて終電ギリギリの電車に乗った。結局家に着きゆっくりできたのは日付が変わった辺りだった。

夏美を部屋に見送り、自分の部屋に入った俺は倒れるようにベッドに入った。

…とこまでは良かった。  
俺はすっかり忘れていた。 今日、4日は…。

「さと君？」

ぼっと物思いに耽っていた俺に

一人の女の子が心配そうに眉を寄せて顔を覗きこんでいる。

「…あ、なに？」

ハッと我に返った俺は女の子にすっとんきよな返事を返してしまう。

「何、じゃないよー。 ぽーっとしてるから具合でも悪いのかと」

「いや、そんなんじゃないからさ」

「そっ？ ならいいけど」



女の子はホツとした様子で顔を離した。

「それにしても、さと君とデートなんて久しぶりだね？」

女の子は照れたように微笑んだ。

「バツ：バカ、何恥ずかしい事言ってるんだよ！」

俺は、照れ隠しにそう言った。

くすくす そんな様子を見て女の子は笑った。

この笑ってる女の子。

柳<sup>やなぎ</sup> 智瀬<sup>ちせ</sup>は俺の彼女だ。

俺が高校に入学してすぐ彼女に呼び出された。

古典的な展開だった。

その日も放課後になり、俺は帰ろうと自分の靴棚の扉を開けた。

「ん？」

靴の上に白い手紙が二つ折りにされて置いてあった。

「なんだこれ？」そう思いつつ、手紙を開く。

白い手紙の右下の端には白いハトのようなキャラが描かれている。

女の子だろうか？

独特な丸い文字で書かれている。

“ 放課後、校舎裏で待ってます ”

書いてあったのはそれだけだった。

これって、もしかして。

らぶれたー なのだろうか？

「…とにかく行ってみよう」

まだ居るかは分からないが…俺は行ってみる事にした。  
手紙を制服のポケットにしまいこんで走りだした。

…校舎裏での初めて智瀬に、いただいた印象は“かわいい”だった。

肩までのショートカット。

小さくて、でも子供の様に大きな瞳。

華奢で守ってあげたくなるような弱々しい、でも芯はしっかりある。  
そんな印象。

腰まで髪を伸ばして茶髪に染めてギャル化している夏美とは真逆な  
印象だった。

俺を見つけ、智瀬は微笑んで言ったんだ。

“あなたが好きでした、やっと…勇気を出せました”と。

あの頃から今までの2年間。

俺と智瀬は付き合っている。

## 1章 Bパート

話を戻すと、その後の俺たちのデートといえば。

雑貨屋を回って『これ、かわいいね?』などと智瀬のはしゃぐ姿を見たり

喫茶店で一緒にスパゲッティを半分こしたり。

…至って順調に進んでいった。

そして、日も暮れ始めた頃。

俺が「帰るか」と言うと、智瀬は上目遣いでこう、せがんでくるのだ。

「さと君、あたし行きたい所があるの」と。

俺と智瀬は一緒に電車に乗り“たなべまち田辺町”で降りた。

そこは、俺の住んでいる凧名町程ではないのだが、かなり田舎町で。

ここにある花江山はなえやまは、季節によって咲く花があり、その景色はそれぞれの色に咲き乱れ、とても華やかだ。

外の人がよく観光に訪れる唯一の売り出しスポットだった。

その花江山の中腹に、小さな教会がぼつりと建っている。

その教会は昔は山に暮らす“アダレットなんとか”神教の信者がそこに祭られている恋女神という神様に祈りを捧げる為に使っていたらしい

ことを昔、婆ちゃんから聞いたことがある。

最も今は信者も居なくなり、そこに住んでるのは今にも倒れてしま  
いそうな

老神父が一人居るだけだった。

その教会に、智瀬は行きたい と言ったのだ。

ギイイイ……。 重く堅い扉を開ける。

「……………」

静かだ、どうやら誰も居ないようだった。

「ねえ、さと君。 ついてきて」

智瀬は、俺の手をキュッと握るとそのまま引い歩き出した。

「……………これは」

智瀬に連れてこられた先は、教会の一番奥。

天に向かって祈りを捧げる女神の像の前だった。

「恋女神<sup>アダレット</sup>。 恋愛成就と平和を祈る女神様。」

そつと、智瀬は呟くとそのまま<sup>そのまま</sup>跪き祈るようなポーズをとった。  
そして、瞳をそつと閉じる。

「……………なにしてんだ？」

「見てわからない？ 恋女神<sup>アダレット</sup>に祈りを捧げてるの。」

智瀬は瞳を閉じたまま答えた。

「祈り……」 何故だが、祈りを捧げる智瀬は切なく見えた。

それが何故なのか、分からないけれど。

その時だった。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。

教会の鐘が鳴り響いた。

あの老神父が鳴らしたんだろうか？

「っ！！」

と、智瀬はびっくりしたように跳ね上がった。

「ど、どうした？」 慌てて智瀬の顔を覗く。

「やった！ 鐘がなったよ！ 嬉しい！！」

にこつと笑うと智瀬は俺に抱きついてきた。

「お、おい。いきなりどうしたよ？」

「知らないの？ この鐘の言い伝え。」

「？」

「この鐘はね、“愛し合ってる二人が一緒に聞くと幸せになれる”  
ていつ言い伝えがあるんだよ」

智瀬は俺に抱きついたまま言った。

「へえ……で、そんなどこかのギャルゲーじゃあるまいし……」

女の子って本当にそういうの好きだよなあ。 などと思ってしまう

俺は。

心が荒んでしまっているかもしれない。

「私たち、女神様に祝福されたのかな？」

そんな俺を他所よそに、智瀬は嬉しそうに俺の胸に顔を埋めた。

「……まあ、いいか」

智瀬が嬉しそうだからいいか。

それに、本当に祝福されたのならそれは喜ばしいことだ。

何故なら。

俺たちは幸せになれるということなのだから。

俺はそつと、智瀬の頭を撫でてやった。 智瀬はくすぐったそうに笑った。

その時の俺たちは気づかない。 教会の重苦しい扉の向こうから覗く視線に。



## 2章Aパート

【8月5日】

この日、俺と智瀬、それに夏美は学校に来ていた。夏休み中なのに登校とかマジでだるい。

何故に学校なのかというと夏期講習があったからだ。

俺と智瀬は物理。 学年が違う夏美は数学。

普通に宿題もある中で何故講習など受けなければいけないのか。

俺の担任曰く、『講習受けないとこの後大変』なのだという。

全くもってダルい。

というわけで、俺は適当に講習を受けたわけだ。

「さと君、それでいいの？」 と智瀬には苦笑されたが気にしない。

さて、講習が終わったので帰るとする。

俺は智瀬と一緒に肩を並べて廊下を歩いていた。

「ん？」 「ふと、遠くで誰かがこちらに向かって手を振っている。」



「あれって、夏美ちゃんじゃない？」 智瀬は目を丸くして言った。

「本当だ…あいつ、何やってんだ？」

そんなことを思っていると、手を振りながら俺に駆け寄って…。

ガスッ！！

「ぐほっ?!」

何故か、俺の鳩尾みそおちに肘鉄を食らわせた。

「げほっ…げほっ」 咳き込む俺に夏美は悪戯な笑顔を見せて。

「お兄ちゃん、一緒に帰ろっつ」と言う。

「お前…普通に登場できないのか?! 大体なんだよ、今のフライング肘鉄は?!」

フライング肘鉄、そんな技が実際あるのかは知らないが。

「え? こっちの方が私らしくない?」

こっちってどっちですか…。 もう訳が分からない。

「ね？ ね？ いいでしょ？」

夏美の笑顔の矛先は智瀬にいった。

「えつと…うん、私は構わないけど」と智瀬は苦笑交じりに答えた。

「やったあ！ それじゃ行こう！」

「……………」

鳩尾を手で抑え、不機嫌そうな俺など何処吹く風で。

夏美は智瀬の手を引き、スタスタと歩き出した。

「ちよっ 待て！ 俺を置いて行くなあ！！」

俺も慌てて二人の後に続く。

夏美は笑っていた。不自然なくらいに。

しかし、その時の俺は“それ”を気にも留めていなかった。

## 2章Bパート

【8月6日】

翌日、俺は智瀬とデートしていた。

デート と言ってもこの前みたく外には出掛けていない。

今日は智瀬の部屋でのんびりする日なのだ。 所謂、いわゆるお家デート。

俺たちの住んでいるこの風名町は、田舎だ。

海とか田んぼとか以外は、本当に少しのスーパーやコンビニ。

娯楽といえばパチンコ屋しかない。

俺たち若者が行くような所はハッキリ言って皆無に近い。

だから、俺と智瀬は金がない時とか天気が悪い日。 もちろん何も  
ない日でも

大体はこの智瀬の部屋で過ごす。 智瀬の部屋は二階で日当たりも  
良く風も良く通る。

なので、カーテンを閉めて窓を開けると真夏でも結構クーラー要ら  
ずだったりする。

理由はもう一つあって、智瀬の両親は仕事が忙しいらしい。

デザイナーをやっているらしく、海外を忙しく飛び回っているとか。

両親も兄弟も居ない智瀬の家は、全く気負いせず居れる空間。

それに、智瀬も居るのだ。俺にとってはパラダイスなのだ。

「はあ、なんか眠くなってきたなあ」俺は智瀬のベッドに横たわると欠伸あくびを一つ。

「さと君、私の部屋に來ると必ずそれだよね？」

智瀬は俺の横に腰掛けた。

「ん？ そうだったか？」

「うん、そうだよ？ ひょっとして何かを期待してるの？」

悪戯に、智瀬は笑った。

「ばっ…そんなんじゃないよ」思わず言葉に詰まる。

期待してない と言えば嘘になる。俺だって健全な男子なのだか  
ら。

…そう言えば、俺たち付き合ってから2年以上経つのにその“何か”は愚かキスすらしていない。

手を握ったり、抱きしめあったり。 智瀬のか細い肩を抱いたり。

恋人らしいことと言えば、それだけだった。

今時珍しい程の、インセント純粋な関係だった。

したくないわけではない。むしろ、したい。

でも、“それ”をしてしまうと何かが壊れてしまう。 そんな気がして進めないんだ。

きっと、智瀬も同じなんだと思う。 今までの関係…では居られなくなる気がするから。

「……」 俺は黙って智瀬の膝に頭を乗せた。

智瀬はクスクスと微笑みつつも、俺の頭を撫でてくれる。

その感触が、智瀬から溢れてくる甘酸っぱい香りが。 温かさが好きだった。

だから、これでいい。このままでいいんだ。

無理に変わる必要なんてない。

もう暫くは、このままで居たいから。

俺は、柔らかな智瀬の中で静かに眠りへと落ちていった。

## 2章Cパート

「  
きて

誰かの声がする。

誰だろう？ 凄く聞き覚えがあるような気がするのだけど。

「  
起きて

起きる？ 俺が？

「もう、さと君ったら・・・起きなさいっ！」

バシッ！！！！

んあ？ 俺は何故か痛む後頭部を手で抑えながらムックリと  
起き上がる。

「もう、さと君？ 寝すぎだよ。 もうすっかり夕方だよ」

シャアー……。。

智瀬は苦笑いすると窓のカーテンを開けて見せた。

窓からは夏場独特の涼しい風と、オレンジ色の夕陽の光が差し込んでいた。

「俺……。そんなに寝てたのか？」

窓の外を覗き込む。

俺たちの住む町は、見事に茜色に染められていた。

住宅の隙間や公園に生い茂る木々や家の屋根とのコントラストが

とても幻想的に思えて。 綺麗だと思った。

…ふと、下方に誰かの気配を感じた。



俺は、気配の方向に眼を向ける。

「……………」

そいつは智瀬の家の前、その玄関の前にいた。

ぼーっとしていて、微動だにせず。ただ黙って家のドアを見つめていた。

その瞳は夕陽の所為か、茜色に染まり濁っている。まるで生気が感じられなかった。

「夏美……」俺は思わず、そいつの名前を口にしていた。

何故ここにいるんだ？俺は夏美にこの家の場所なんて教えていない。

ましてや、智瀬と会うだなんて言ってきたわけでもない。

なのに、何故あいつはここにいるんだ？

「え？あ、本当に夏美ちゃんだ」

俺の様子に気がついたのだろう、智瀬は俺の隣にやってくるのと窓の

下を覗き込んだ。

そして眉を寄せ、俺に言う。

「夏美ちゃん、私の家の前で何してるの……？」と。

「分からない……てか、場所も知らないはず……」

ふと、夏美の口が動いた。何かを小声で言っているようだ。

お……

に……

い……

ち……

ん……

「……?!」

分からない、確証なんてない。でも、俺にはそういう風に“聞こえた”。

途切れ途切れに、俺を呼んでいた。そんな気がしたのだ。

「っ!」

「え?! ちょっとさと君?!」

バン!! 突然部屋のドアを開け玄関へと走っていく俺に智瀬は驚いたような声を上げた。

「……」 そんなの気にしていられなかった。

なんだか、嫌な胸騒ぎがしたんだ。

「夏美?!」 玄関のドアを勢い良く開けると名を強く呼んだ。

.....

.....。

しかし、さっきまで“そこ”に居たはずの夏美の姿はもう無くなっていた。

「夏美.....」

一体どうしたっていうんだ？　なんで此処を知ってたんだ？

何故ドアをじっと見つめていたんだ？　何故...俺を呼んだんだ？

何故...何も言わないで居なくなるんだよ...。

「さと君...？　夏美ちゃんは...？」

「.....」

俺の耳には、その時智瀬の声は届いていなかった。

分からないことだらけで、頭が軽く混乱していた。

あいつの“茜色の瞳の先”は、何を見つめていたんだ…？

### 3章 Aパート

夜。俺は重い足取りで家に帰ってきた。

結局あの後、夏美は現れなかった。

何をしていたのか、何を思っていたのか。今の俺には全く想像が  
つかなかったんだ。

「夏美ちゃん、どうかしたの？」

智瀬はそんなことを心配そうな顔をして言っていた。

「いや、分かんないけど…でも…あいつの様子…」

俺の言葉を続けるように、智瀬は呟いた。

「なんか、寂しげ…だったよね」

「…ああ」

そんなどうしようもない状況の中、俺は智瀬の家から早めに切り上

げた。

智瀬と俺の家の距離、徒歩で50分程度。田舎といえど、この町は広い。

決して近くはない距離、いつもならどこまで乗っても一律150円の路線バスで帰っている。

正直、50分の距離は歩きたくないから。疲れるし。

でも、今日はなんとなく。歩いてゆっくりと帰りたい気分だった。

夕陽に染まった空を見上げながら俺は歩いていく。

ふと見上げた空に、夏美の悲しげな顔が映し出されて俺は頭をかぶり  
ブンと横に振る。

まるで、それを落ち消すかのように。

「分かんねえーよ……」 ポツリ、俺は立ち止まり呟いた。

俺は真つ直ぐ帰る気にもなれず、適当にコンビニ等で暇つぶししていた。

そんなこんなで、家に着いたのは日が暮れてからだった。

「ただいま」 玄関のドアを開け中に入ると母さんが俺に駆け寄ってきた。

「あ、聡。 ちょっと大変なのよ！」

その様子で分かった、何かあったらしい。 まさか……。

嫌な胸騒ぎをぐつと拳を握り堪えつつ、俺は平然を装った。

「なんだよ？ 大変なことって？ まさか、また父さんが別の女と歩いてたとかそんなクダラナイ……」

チャカすつもりで、言った。 が、それがいけなかった。



「そんなんじゃないわよ!!」 母さんは少し泣きそうだった。

「え・・・あ・・・悪い・・・何があつたんだ？」

「夏美ちゃんがね・・・」

「え・・・？」

・・・

・・・

・・・

「くそっ！ なんなんだよ！」 俺は玄関から勢い良く飛び出した。

母さん曰く、夏美がまだ帰らないそうだと。携帯も電源を切っていて繋がらない。

友達のところにも連絡してみたが今日は来ていないという。

俺は走りながら腕時計を見る。 8時…。確かに、いつもこの時間なら帰ってきているはず。

それに夕方のこともある。何かを思い詰めた様な…何かを待ち続けているような瞳だった。

それと、何かが関係あるのだろうか。

分からない。何も分からなかった。

ただ、今俺にするべきなのは…。

「くそっ…どこまで心配掛ければ気が済むんだよ…! あいつは!」

そう、あいつを探すこと。それだけは分かっていた。

なんとなく、あいつが俺の名前を呼んでいる。そんな気がしたから。

宛てなんかはない、でも俺は心当たりを手当たり次第探し回った。

### 3章 Bパート

それからどのくらい探し回ったかなんて覚えていない。

学校・友達の家・コンビニやスーパー。

夏美の行きそうなところは殆ど探しつくした。

あと一つ、一つだけ心当たりがあった。

「頼む・・・居てくれ・・・」 最後の望みを託すように、俺は眩  
き踵きじすを返して走り出す。

それは、昔二人で来たことがある“花形卦公園”はながたけ”。

大きな公園で、その敷地面積は某大規模野球ドームがすっぽり入り  
そうな程。

公園 ということにはあまりにも大きすぎるため、地元の人には“森み  
たいな公園”。

通称『モリコー』と呼ばれている。

その、大きな公園に小さい頃一回だけ行ったことがあった。

小さい頃の記憶だし、なんで言ったかそこで何をしていたのかは覚えていない。

でも、もうそこしか宛てはなかった。

・・・  
・・・

「はあはあ・・・」 肩で息をしながら公園へと足を踏み入れた。  
入ってすぐの所に水飲み場があった。

キゅっとな蛇口を捻って水を少しだけ出して飲む。

走ってきた為、なのか口や喉がカラカラに渴いていた。

飲んでも飲んでも、口の渴きはとれなかった。

蛇口を閉じて、俺は辺りを見渡した。

とりあえず探してみるしかない！！

俺はゆっくりと歩を進めていった。

地面には歩道用に白いコンクリートのタイルが敷き詰められていて  
その道沿いにブランコやシーソー等の子供たちが遊ぶ遊具があった。  
広い公園なので、全部の遊具の数なんて把握していない。まして  
や数年ぶりに来たから尚更だ。

夏場だというのに、公園の中はやたらとヒンヤリとしていた。

一瞬今は夏ではなく冬なのか？ と錯覚した。

でも、周りの木々や草っ原から聞こえてくる虫の声<sup>が</sup>俺を錯覚から引き戻す。

暗く、とても静かな夜の公園。

ぽつりぽつりと立って、辺りを白い光で照らしている外灯<sup>が</sup>も少し寂しげだ。

こんなところに、夏美は居るのだろうか？

暗く、冷たい公園の夜道を歩いていると

ふと、そんな疑問が思い浮かんだ。

俺は、何か勘違いをしてるんじゃないのか？

探しているのは夏美が心配だからではなく

今の生活が“変わってしまう”のが怖いからではないのか？

「違う！！ そんなんじゃない！！」

その疑問を掻き消すように、俺は頭をブンブンと横に振って走り出した。

「夏美いー！！ 居るのか？！ 居るなら返事をしてくれー！！」

走りながら、四方八方に夏美の名前を呼び続けた。



もう必死だったんだ。とにかく見つけて、安心したかったんだ。

数分、俺はそうやって走り続けた。でも夏美はとうとう見  
つからなかった。

「夏美…っ くそっ!!」 自分の無能さに異様に腹が立ち、足元  
に転がっていた

石ころを勢い良く蹴飛ばした。石ころはカラカラと鈍い音を立て  
一つのベンチの方に転がっていった。

その転がっていた方を見ると、ベンチにちょこんと誰かが座ってい  
た。

外灯の明かりに照らされて、顔が辛<sup>かろ</sup>うじて把握できた。

「夏美!!」 そう、そこに居たのは夏美だった。やっと、やっ

と見つけた。

俺は夏美に駆け寄った。

### 3章Cパート

「夏美！！ 探したんだぞ！！ こんな所で何して

俺は夏美に駆け寄ろうとした。

しかし。

「来ないでっ！！」 と夏美は叫び、俺を制止した。

「えっ？」 俺は思いがけない夏美の言葉に目を白黒させた。

「来ないで、来たらダメ・・・」

夏美の声色こゝろいろは、なんだか悲しげだった。

まるで、何かに怯えているように。

「どうしたんだよ！ 家に帰るぞー！ー！」

それでも、俺は夏美に近づいた。そして眼前までやってくる。…。

「…?!」 俺は思わず言葉を失う。

「やあ…来ないでえ…!!」 夏美は自分の腕で自分の肩を抱いてベンチの上に

蹲ひづっていた。

それは、まるで“何か”ではなく“俺”に怯えているかのようなだった。

ビクビクと体は細かく震え、俺を拒絶しているかのような…。

「……………」それでも俺は、いかなければならない。俺は兄貴だから。

そして、今怯えているこいつは…夏美…だから。

「夏美…」俺は夏美の横に座った。

「っ…」俺の気配に気づいたのか夏美は一瞬体をびくつとさせた。

「帰ろう、俺たちの家に」俺はそうやって優しく頭を掻き回すように撫でてやる。

「やめてよっ…」そう夏美は言ったがさっきの様な勢いはもうなかった。

「母さん…心配してるぞ？」

「……………」

「俺だって、お前が心配で今まで何時間も走り回っていたんだよ。」

夏美<sup>おまえ</sup>が、居なくなっちゃった気がして。怖くて居ても立っても  
いれなくて」

「えっ…そんなに…探してくれてたの…?」

夏美は俺の言葉に八つとしたように顔を上げた。

その顔は、涙や鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。

「……」俺は黙ってポケットに忍び込ませていたハンカチで夏  
美の顔を拭いてやる。

「んう…」夏美はどこかくすぐったそうに微笑んだ。

泣いてたのか？何かあったのか？俺で良ければ相談に乗るぞ？  
そう言ってやりたかった。

でも今の夏美の憔悴<sup>せうすい</sup>し切った顔を見てたら

なんだか、聞けなくなってしまった。

だから、俺はただ頭を撫でながら言ってやった。

「家に、帰ろう?。」と。

夏美は少しの間、沈黙を貫いていたが俺の顔をちらっと見ると

すぐに視線を逸らし、無言でコクリと頷いた。

「よし、ほら行くぞ」俺はベンチから立ち上がる。

「……………」しかし夏美は立ち上がろうとせず、俺を上目遣いで見つめていた。

「な、なんだよ?。」

いつもと違う“しおらしい”夏美に、一瞬ドキっとしてしまっ

「手え…寂しい…」 甘えた声。でもどこか寂しげで。

「…ほら」 俺は思わず夏美に手を差し出していた。

「ありがとう…お兄ちゃん…」

夏美はキュッと俺の手を握ってきた。

その手は、思ったより小さくて冷たかった。

本当に、夏美も一人の女の子なんだな と改めて意識してしまう。

「えへへ…なんかいいね…こういうの」 夏美は弱々しい声で呟いた。

「…バカ」 俺は照れ隠しにそう言って、そっぽを向いた。



暗く、肌寒い夜。俺と夏美は手を繋ぎ公園を後にした。

掌てのひらに伝わる温もりが、なんだかかむず痒かゆかった。

## 4章Aパート

女の子が、泣いていた。

大きな樹の下に佇み、声を殺して泣いていた。

「……………」 俺はその女の子に駆け寄って声をかけた。

…あれ？ でも、なんて言って声をかけたんだっけ…？

【8月7日】

「…きつよ」

んんん。。。

「起きてよお」

んんん。。。

「お兄ちゃんってばあ」

グラグラと、俺の体が揺すられた。

「んあ……なんだよ……」  
「……」  
じつじつとそつに俺は目をゆっくりと開ける。

暗かった。　まだ夜なのか？

窓から月明かりが射していて部屋は辛うじて見通しがあった。

「あ、やっと起きたね？」　俺のベッドの淵に夏美はちょこんと座っていた。

「ん……えつとお……」　寝ぼけた頭で考える。

何故ここに夏美がいるんだ。

俺は寝ぼけでもして部屋を間違えてしまったのか？

「……………」　辺りを見回してみる。　そこは確かに俺の部屋だった。

「・・・なんで部屋（こ）に居るんだよ」 少し考えた後、そうツツ「んだ。

「んつとお・・・そのお・・・眠れなくて」 夏美は俯く。

胸元に枕を抱えながら、俺を上目遣い気味に見つめる。

「・・・んで？」 何が言いたいのかサツパリ分らん。

「だからあ・・・そのお・・・一緒に・・・ね・・・ゴニョゴニョ・・・なんて・・・」

声が小さくて後半が聞こえない。

「・・・ハッキリ言えよ」

「だから・・・っ もっつー!..!」

夏美はもう限界という様に俺のベッドに潜り込んできた。

そして俺の隣にもぞもぞと移動すると「こつしたかったの!」と頬を染めた。

「てっ、ちよつと待てい!」いきなりの行動に一気に目が覚める。

「んえ…?」

「何故俺の布団に入ってくる? まさかあれか?

“眠れないから俺と一緒に寝たい。 じゃないと眠れない”とか  
「?」

「……………」夏美は無言だったが小さく頷いた。

「お前なあ……………」

小さい頃は、こつという事がよくあった。

でも、父さんと母さんが離婚して会わなくなっただけからは一度もなかった。

会ってないのだから、当たり前だけど。

とはいえ俺たちは高校生だ。いくら兄妹でも、これは色々マズイ気がする。

「俺たち……ガキじゃないんだぞ？」

「……………そうだけど」

そう言うと、悲しげに俯く。

「……………はぁ」 何故か俺は、昔からこの夏美の悲しげな表情にだけは勝てなかった。

「ああ、もう分かった分かった。分かったから、そんな悲しい顔すんな」

溜息をつくくと、俺は黙って夏美に背を向けるように寝転び布団を被る。

「お兄ちゃん…ありがとう…優しいね…っ」

夏美は嬉しそうな声をあげると俺の横に背中合わせになるように寝転んだ。

…  
…  
…  
…  
…

…  
…  
…  
…

…  
…  
…

それから、どの位の時間が経ったのかなんて覚えていない。



一人用のシングルベッドなので決して広くない。

むしろ、二人で寝るのにはやはり少し窮屈だ。

小さいなベッドの中に二人。当然俺と夏美の背中では密着していた。

幼い頃は、全然感じなかったその感触。

それ程、いつの間には俺たちは大きくなってしまったということな  
んだろうか。

それ程、俺たちの時間は進んでしまっていたのだろうか。

## 4章Bパート

「お兄ちゃん、まだ起きてる？」

ふいに、夏美が小さな声で話しかけてきた。

「…ああ」

「そっち向いても…いい？」

「…ああ」

「ん、ありがとう…」

ゴソゴソ。 夏美の動く気配がした。

きっと夏美は今、俺の後姿を見つめているに違いない。

「お兄ちゃんってさ…いつの間に、こんなに大きくなったのかな」

夏美は少し切なげに呟いた。

さっき俺が思った事と同じ事を思ってたんだな… と俺は心の中で苦笑する。

「そんなこと、俺に訊くな」

「うん…そだよね…ねえ、お兄ちゃん？」

「なんだ？」

「昔、覚えてる？ よく二人で遊んだよね？ 一緒に町に探検に出掛けたり。」

海や山に行って事故に遭いかけたり… 大変なこともあったし、泣いたこともあった。

でもね、それは同時に楽しくもあったから。 あたしにとって大切な思い出なんだ。

お兄ちゃんが居た風景は、全て特別に見えたんだよ？」

「……………」

「お兄ちゃんが居れば楽しかった。お兄ちゃんが居れば嬉しかった。

悲しいことも、寂しいことも、怖いことも。何もかも、嬉しかった。

喧嘩もいっぱいした。仲直りもいっぱいした。あたしが泣く度に頭を撫でてくれた。

イケナイ事したら、怒ってくれた。その優しいお兄ちゃんは……………。

あたしにとってはとても近い存在で同時に遠い存在でもあって。」

「……………」 俺は夏美の話を黙って聞いていた。

「そのお兄ちゃんは、昔は近くに居た筈のお兄ちゃんは。

今は凄く“遠く”感じる。別の世界に行っちゃったみたいで。」

夏美は俺の背中に手をそつと当てると、こつ静かな声で呟いた。

「智瀬さんのこと、好き？」

「……………」俺は少しの間を空けて、「ああ」と答えた。

「あたしの、ことは？」

その声は消え入りそうな程微かな、でも俺の耳にはきちんと聞こえた。

遠慮しがちではあったものの、夏美は俺に“何か”を期待しているようにも思えた。

「好きだよ、お前は俺の妹だからな」

その期待を裏切るかのように、俺は夏美に言った。

俺はずっと前から気づき始めていた。

「妹として？ そんなの嫌だよ……」 夏美はキュッと俺の背中を掴んできた。

ずっと前から、薄々そうなんじゃないかと思っていた。

でも、気づかないフリをしてい

たんだ。

「あたしは…本当はずっと前から…智瀬さんよりも前から…」

夏美の手は震えている。その感覚が背中を通じ伝わってくる。

やめてくれ。

「お兄ちゃんのこと…」

やめてくれー！

「す

」

「やめてくれっ！ー！ー！ー！　俺は思わず口にしていた。

「っ……！！」　びくと、俺に触れた手が震えた。



でも、その手は離れなかった。

「俺たちは、兄妹きょうだいなんだ。だからそれ以上は言ったらダメだ」

淡々と言う俺に夏美は「でも・・・」と、まだ何か言いたげな様子だった。

「でも、もへちまもない。俺たちは血の繋がった家族なんだ。

…それ以上でも、それ以下でもない。」

分かっている、この言葉は夏美を傷つける凶器にしかならない。

俺は、夏美を傷つけてしまっただろうか。

「……………」

それを最後に、二人の会話は途切れた。

## 4章Cパート

それから、俺たちは会話のないまま時間だけが過ぎていった。

何分経ったかはもう分からない。

ただ、聞こえてくるのは二人の呼吸の音。そして、部屋で機械的に動く時計の音。

ふと、誰かのすすり泣くような声が微かに聞こえてきた。

「……夏美、泣いてるのか？」 背中越しに、夏美に問いかけた。

「……」 夏美は答えなかった。

ただ、ぐすつと鼻をすする音だけが聞こえてくる。

・・・さっきは言い過ぎただろうか？ 泣くほどだもんな、少し言い過ぎたかも。

そう思い、「ごめんな」と呟いた。

「・・・・・・・・・・」 相変わらず夏美から返答はない。

「・・・・・・・・夏美？」 あまりにも返事がないので俺は心配になり

夏美の方に体が向くように寝返りをうった。

ぼんやりと、夏美の顔が月明かりに照らされていた。

「み・・・・・・・・しないで・・・・・・・・っ」 夏美はそう言ったが顔は隠さなかった。

顔をクシャクシャに歪めて、声を押し殺して泣いているようだった。

夏美の頬には光る軌跡が走っていた。

それは今も尚、ハラハラと大粒の雫を落としている。

その顔、声。とても悲しくて切なくて。

「泣くなよ……」

俺は夏美の頭に手を伸ばした。

何もできないけど。

今の俺に何かをしてあげる自信なんかないけど、できることは。

頭を撫でてやること。 だと思ったから。

その時だった。

「!!!」 夏美はその俺の腕をグッと掴むとグイッと自分の元に引き寄せた。

夏美と俺の顔が眼前にある。 夏美の息が鼻にかかって少しずつぐつたかった。

「なっ・・・おまつ 何やって...」

「お兄ちゃん・・・あたしは・・・」 頬を蒸気させて、呟くように言った。

「あなたが、好きです」

トクン……。

可愛かった。

「お兄ちゃん……」 夏美はそっと瞳を閉じた。

まるで何かを要求するかのよう甘えた声で俺を呼びながら。

「……………」 この状況で夏美が“何を”欲しているのか

流石さすがの俺でも分かっていた。

でも、眼前にある夏美の顔が、声が、吐息が、香りが。

今この瞬間、愛しく思えた。 凄く可愛く思えた。

そんな俺を“兄妹だから”という理性が支えていた。

でも、その俺の心を悟ったかのように夏美は呟いてくる。

「キス・・・してください・・・」

。 吹っ飛んだ。 刹那、全てが。



「……………」

俺はそっと、夏美の唇に自分の唇を重ねた。

自分にとって、初めてのキス。 智瀬ともしてないキス。

柔らかく、とても心地よいものだった。

俺は今・・・何をしているのか。一瞬分からなくなるほど。

少しの間、俺たちは感じてはイケナイ感触を感じながら、唇を重ね合っていた。

## 4章Dパート

トクン……トクン……。

無常なほどに、俺の心臓は高鳴っていた。

これまでに感じたことがないほどに。

「……」俺はそつと重ね合っていた唇を離す。

「……」夏美は夢心地のようにフワフワと視線を漂わせている。

そんな夏美の表情をジッと惚<sup>ほつ</sup>けた様に見つめた。

夏美って……こんなに可愛かったか……？

見慣れているはずの顔。

そう何年間もずっと見てきた顔。

でも、瞳を潤ませて「はうっ」と言わんばかりの顔をしている夏美は

妹ではなく、一人の女の子として可愛いと思った。

そして、夏美は恥らいつつも微笑み言った。

「えへへ、やっとお兄ちゃんとキスできた」と。

「…?!」 その顔は 。

あなたが好きでした、やっと…勇気を出せました

あの日、そう言って微笑んだ智瀬の顔と重なった。

その刹那、俺の心はズキンと痛み出した。

目の前には夏美の嬉しそうな顔。でも今智瀬は俺を想い俺を求めているだろうか。

夢の中でも、俺と“お家デート”をしているんだろうか。

「っ……」　バツと音が聞こえそうな勢いで俺は夏美の両肩に手を置き

その体を突き離れた。

「え、お兄ちゃん……？」　突然の事で驚いたのか夏美はキョトンとしていた。

俺は夏美の手を引いて布団から追い出すようにベッドから出た。

「え……？」

「悪いけど、自分の部屋で寝てくれ」

そう言つと、ドアを開けて俯く。

「え……でも……」

夏美の声色は困惑していた。

「頼むから……っ」

俺は嫌がる夏美を無理矢理部屋の外に追い出すとドアを閉めて施錠をした。

ドンドンドン。　ドアが叩かれる。

「お兄ちゃん開けてよ？　」こゝ、暗くて怖いよ……」

ドア越しに、泣きそつな声がこもって聞こえてくる。

「……………」

でも、今の俺にはその声に反応する余裕なんてなかった。

「ごめん……」ポツリ、ドアを見つめて呟いた。

その“ごめん”は誰に対して言ったものなのか。自分でも分からないまま。

そしてドアの前で蹲り、静かに声を殺して泣いた。

先程の夏美のように、誰にも聞こえないように。

皮肉にも、さっきまで傍に感じていた妹なつみの温もりはまだ…消えていなかった。



どの兄妹等しく、きょうだい“越えられない一線”が存在している。

でも、俺たちは今それを越えてしまった。

俺は夏美を、なつみその存在を。受け入れてし

まった。

## 5章Aパート

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

女の子が泣いていた。 俺は近づいた。 そして話しかけた。

でも、俺の後ろにもう一人の女の子が居て不安げに口にしたんだ。

「あの子、迷子なのかな」と。

確かにそう言っていたはずだった。

ぼんやりとした風景に木霊する、二つの声。

君は誰だっけ・・・？　なんで俺を知っているの・・・？

茜色の風景の中で、俺は泣きじゃくる女の子に手を差し伸べた。



「なんで俺はこんな事になっているんだ・・・？」

天井を見つめ、考える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・?!」

思い出した。

その刹那、昨日の事が一気に脳裏に流れ込んでくる様にフラッシュバックする。

ブンブンと思わず頭を大きく左右に振った。

消し去りたかった。その出来事を、事実を。忘れたいと思った。

でも、そんな現実逃避で起こってしまったことは消えるはずもない。

…そんなの、心のどこかでは分かっていた。

ふと、気がつく。

「そつだ、夏美は？」 あいつは今どこに居るんだ？

昨日、部屋から追い出してきりだから。まさかまだ部屋の前に居るなんて事は…。

そう思い恐る恐るドアを開けてみる。

…そこには人の影はなく、流石にもう居ないようだった。

何故か少しホっとしている自分が居た。

しかし、なら夏美は今どこに行ってしまったんだろうか？

寝巻きのまま階段を早足で駆け下りて俺はキッチンで軽快に包丁をトントンしている

母さんに向かって「夏美を知らない？」と問いかけた。

母さんの返答は「知らないわよ？ 朝ごはんも食べずに何処かに出掛けて行った」だった。

どうやら母さんも何処へ行ったかは分からないらしい。

「どっすっかなあ……」

仕方なく、妙な胸騒ぎがした俺はポケットから携帯を取り出した。

夏美に電話したほうが早いと思ったからだ。

早速開いてみる。携帯の液晶画面には“新着メール2件”と表示されていた。

カチカチとボタンを操作し、メールを開いてみる。

1件目のメールは毎朝早くに智瀬がくれる「おはよう」メールだった。

所謂、モーニングコールならぬ、モーニングメール。

それは、あまりにもいつも通りの内容で。

“今日も会いたいな”等と無邪気な文字達がそこには並んでいた。



その普通すぎる内容が、俺の胸を痛いくらいに締め付けた。

「ごめんな」

呟いた。

言ったところで聞こえないし、届かないが。

それは突発的に、それは反射的に口から漏れ出していた。

カチカチカチ。 智瀬のメールには返信をしなかった。

いつもなら、「今日も会えるさ」などと打って返すのだが。

罪悪感からか、それをするのは、なんだか気が引けた。

カチカチカチ。　　続いて2件目のメールを開く。

受信は今日の午前10時31分。　差出人は…。

「え・・・？」

“ F r o m : 夏美 ”

夏美だった。

## 5章Bパート

夏美からのメールには、こう書いてあった。

『おはよう。 お兄ちゃん。 ねえ、あたしね？

夕べの事、一生忘れないよ。 お兄ちゃんがキスしてくれたこと。

とっても嬉しかったから。 だからね、こつこつも思った。

お兄ちゃんを“取られたくない”。 誰にも、例え智瀬さんでも渡したくないって。

だからね、これからね。

あの女を説得しに行ってくるね。 お兄ちゃんに、もう二度と近づかないように。

。 夕方までには戻ります。 安心して待っててね。 そして……

帰ってきたら、昨日の続き。期待してるからね　じゃ、行っ  
てきます  
』

「.....」

智瀬を説得しに行く？　俺を渡したくないから？？

そして、俺とまた“夕べの行為”をしたいと言つのか？？？

待ってくれよ。俺はそんなの望んでなんかないっ。

智瀬と離れるなんて...！　嫌だよっ...！

目線をずらし、携帯の液晶に表示されている現在時刻を見る。

… 11時38分。 夏美がメールを送信してから1時間は経っていない。

説得しに行く という事は今夏美は智瀬の家に行っているに違いない。

… 間に合うかはほぼ絶望的だった。 でも行くしかないと思った。

急いで部屋に戻り、寝巻きから普段着へと着替える。

そして、飯も食わずにドアを蹴る様にして家を飛び出した。

.....

.....

.....

はぁはぁ.....

肩で息をしながらバス停を睨みつける。

「なんで、こんな時に限ってバスがねーんだよ?!」

そして毒を吐く。

今日に限って何故かいつもの路線バスは臨時運休になっていた。

「……くそおつ」 仕方なく、俺は地面を蹴り再び走り出した。

……

……。

「つ、着いた……」 ゼエゼエと息絶え絶えに、俺は智瀬の家の前に着いた。

歩いて50分の距離。結局頑張っ走っても20分程度かかってしまった。

ピンポーン

じんやりと汗搔いた指で、呼び鈴を鳴らした。

「はい、どなた？」 珍しい、聞こえてきたのは智瀬のお母さんの声だった。

「あ、あの…お、俺です…」 肩で息をしつつ、言う俺の気配に気がついたのか。

「あ、聴くん？ どうしたの？ 珍しく様子が変わりだけど？」とお母さんは訊くのだった。

「あの、智瀬…居ませんか？」

「えっと、智瀬ちゃんならさっき夏美ちゃんと何処かに出かけて行



「たわよ？」

「なんだか“散歩”に行つてくるとかなんとか言つてたわね。」

「…くっ、遅かつたか。」

「どうやら、智瀬のお母さんも場所までは知らないらしい。」

「あの、なんか智瀬とか夏美の様子は変じゃなかったですか？」

「慌てて問う俺に、お母さんは『そつえば』という風に。」

「んーと、なんだかいつもと雰囲気が違つたような気がするわね。」

「たかが散歩に行くだけなのに、なんであんな智瀬ちゃんは悩んでるようなの？」

「顔をしたのかしらね？」

「きつと、今のお母さんの頭には“？”(はてな)マーク”が付いてい

るに違いない。

当然だ。お母さんは事情を知らないのだから。

けれども、俺は知ってしまっている。寧ろ<sup>むし</sup>当事者、中心人物なのだから。

散歩に行った？ いや違う。それは絶対に違う。

「ありがとうございます」

俺はインターホンの前で頭を下げると三度<sup>みたひ</sup>地面を蹴った。

.....。

それは唐突だった。宛てもなく探し回る俺の遠くに見えたんだ。

夏美と智瀬が風名駅の入り口で肩を並べて歩いているところを。

二人は、何か会話を交わしているようだったが決してそれは楽しそうな会話ではない

ことは、表情や雰囲気ですぐ十分伝わってきた。

「……………」  
「なんだか足が<sup>すく</sup>竦んで動けなかった。

今二人はどんな会話しているんだろうか？

想像できたからこそ、恐ろしかった。恐怖すら感じた。

それは、嫌悪感からなのか。自分でもよく分からない。

「あ……」 そんな事を考えているうちに二人は切符を買って改札を通ってしまった。

どうやら電車に乗って、何処かに行くようだった。

「くっ……」 痛む胸を抑え、俺も切符を買つと夏美たちは乗ったのと同じ電車。

二人にバレないように、違う車両に乗り込んだ。

そして、二人の様子が見える席に陣取る。

『……………』

電車に乗っている間、二人は終始無言だった。

少なくとも、俺が見てる限り特別な会話はなく。

ただ、隣に座って俯く二人。

なんだか、それがとても悲しく見えた。

数十分後電車は、とある駅へと滑り込んだ。

智瀬は夏美に一言何かを言うと、夏美は黙って立ち上がる。

どうやら、ここで降りるようだ。俺も降りるとする。

でも、この駅って…前に来たことあったよな？

そして、尾行再開。 並んで歩く二人に見つからないようについて

いく。

「なんで、俺はこんなコソコソつけ回してるんだろな…」  
「そう心  
の中で苦笑しながら。」

数十分後、二人はとある建物に入っていった。

「え？」「ここは…」  
「そこは、俺もよく知っている場所だった。」

## 5章Cパート

二人が行き着いた場所。

そこは俺もよく知っている所。

数日前、智瀬とのデートの帰り一緒に立ち寄った教会だった。

なんで、こんなところに？ 智瀬と夏美という妙な組み合わせで？

俺は訳が分からず頭が混乱気味になる。

ギイイイ…。

そんな俺を他所そのとに、堅く、重苦しい音を立てながら教会のドアが開かれ

智瀬その次に夏美と、二人は教会の中へと入って行ってしまった。

慌てて二人の後を追いかける。　　が、流石に中へ入ると気づかれそう  
うで怖かった。

どうしようかと思ったが、幸いな事にドアが少し開きっぱなしにな  
っていた。

俺はそこから中を覗き込む。

二人は恋女神像アダレトの前に肩を並べて立っていた。

「・・・・・・・・・・」　少しの間、二人は無言だった。

が、夏美がいきなり口火を切った。



「それで、なんで教会「こふやうかい」に連れてきたんですか??」

不機嫌そうな様子で。

「ねえ、夏美ちゃん。さと君の事、どう思ってるの?」

「どっして……………」

「好き?」 智瀬は女神像を見つめたまま、ポツリと搾り出すように呟いた。

「…………。そうですねけど…何か?」

「どっして、さと君なのかな? 他の男性ひとじゃダメなのかな??」

さと君は、あなたのお兄さんなんだよ? おかしいとは…思わないの?」

智瀬は、少し遠慮気味ではあったがその言葉に迷いは感じられなかった。

「思いません」 夏美はその言葉を軽く一蹴する。

「そもそも、あたしが誰を好きになろうと智瀬さんには関係ないですから」

表情ひとつ変えずに、そう付け加えて。まるで、感情が抜け落ちた人形ドールのように。

「関係ない…ね？ 本当にそうだったら…楽だったのにな」

ため息をつき、夏美の方に体を向き直す。

「なんですか？」 その気配に気がついた夏美も智瀬の方に体を向ける。

「私は、さと君が好き。ずっと前から好きだったの。」

胸に手を当てて、智瀬はまるで自己主張するみたいにハッキリと言

う。

ずっと前から…？ それ程に智瀬は俺のことを…？

「……………」

「今、さと君と付き合えてとっても幸せなの。だから

「

「バツカじゃないの?!」

智瀬の言葉を遮る様に、夏美は怒鳴った。

「え．．．？」

「幸せ??? お兄ちゃんが本当にあんたのこと“だけ”を好きで居てくれるとでも

思ってるわけ?! 本当におめでたい人ね!! 何も知らないくせにっ」

夏美は、キツと智瀬を睨みつけた。

「…どっいつの意味？」

「そのままの意味。お兄ちゃんが好きなのはあんなだけじゃないってこと」

「?!?!」 智瀬は目を見開き、少し後ずさる。

「…まさか、あいつタベのことを智瀬に話すつもりなのか？  
薄々そうなんじゃないかとは思っていたが…。」

やめてくれっ。 そんな智瀬との関係を壊すようなこと。

いや、本当に“壊した”のは誰だ？ 俺なんじゃないのか？

だから今更『壊さないでほしい』だなんて、言える資格などないんじゃないのか？

止めたかった、夏美の暴走を止めたかった。

でも、そんな罪悪感・嫌悪感・脳裏に焼き付く記憶。 全てが俺の体を強張らせ

動けなくしていた。まるで、足に根が生えてしまったの様に。

「まさか……さと君が……？」

何かを悟ったかのように、智瀬の瞳は更に大きく見開かれる。

「お兄ちゃんはね？」

夏美は勝ち誇ったかのように、胸を張る。

「あたしが、好きなの」

「?!」智瀬の体が一瞬ビクッと震えた。

ちよつと待て。俺が夏美を好きだと？ そんなこと一言も言った  
覚えないぞ。

「お兄ちゃんはね。あたしの頭、撫でてくれるもん」

「そ、そんなの普通の兄妹でもするよ！」

「お兄ちゃんは、あたしのお願ひ。ちゃんと聞いてくれるもん」

「そんなの、普通の兄妹でも…」

「お兄ちゃんは…」

夏美は自分の唇に人差し指と中指をそつと添えた。

そして、無邪気な笑顔を見せて言うのだった。



……  
“キスしてくれた”と。

## 5章Dパート

「キスしてくれた」

その一言に、一瞬時間が止まったかのように思えた。

智瀬の瞳は震え、何かを必死に堪えている。そんな感じがした。

「ウソだと思ってる？」 そんな智瀬の様子を見て、夏美は言うのだった。

「……………」 智瀬は無言で俯くだけだった。

「言っておくけど、ウソなんかじゃないから」

「ウソだよ……そんな……」

「ウソなんかじゃない」

「ウソ……ウソっ」 徐々に智瀬の口調が強くなっていく。

「ウソなんかじゃないってば」

「ウソウソウソ……!!」 ウソっ!!……!!」

智瀬は首が取れてしまう勢いで横にブンブンと振った。

『認めたくない』 そんな意思がハッキリと感じられる。

「ウソなんかじゃないんだってばあ、なんで分からないかなあ?？」

不思議そうに首を傾げる夏美。

「ウソよ!! 夏美ちゃんの意地悪!! なんてそんなウソ言っの?！」

そんな冗談、キツ過ぎるよ!! そんなの傷つくよ!!」

智瀬はイヤイヤと首を振り、夏美に向かって叫ぶ。

「はぁ・・・」 夏美は溜息を一つ。

「そんなに信じたいならさあ。本人に直接聞いてみたら？」

夏美は協会のドアの方向、つまり俺の居る方向に指を指した。

「え……？」 智瀬はその方向にふらふらと視線を這わせる。

「お兄ちゃん、こそこそしてないで出てきたら？」

「……」 いつバレたのか分からないが、もう腹を決めるしかないようだ。

息をつくど、俺は重苦しいドアを開け放つ。

ドアから射す日の光がバージンロードのように、二人への道を明るく

皮肉なくらい、真っ直ぐ明るく照らしていた。

その光の道を無言で歩き、二人の前で立ち止まる。

一瞬だけ、俺は恋女神像アダレットを見つめ智瀬の顔に視線を移す。

「・・・・・・・・」

近くで見た智瀬の顔は、とても悲しげで。今にも泣き出しそうなくらいに不安で。

胸が締め付けられた。

「さと君・・・」

「ごめん、元々は後をつけるつもりはなかったんだけど。」

「なんだか、二人の雰囲気を見てたら声をかけ辛くなっちゃまって。」

違う。今はそんな事を話してる場合じゃないんだ。

痛む胸を心の中で抑えつつ、俺は続ける。

「智瀬…実はな…」と、その時だった。

「お兄ちゃん！ 昨夜あたしとキス、したよね？？」

夏美は微笑み、俺に抱きついてきた。

「……………」俺はそんな夏美を抱き返すわけでもなく、突き放すわけでもなく。

ただ黙って智瀬の顔を見つめるしかなかった。

なんて言えばいい…？ どんな言葉でなら智瀬を“傷つけずに”事情を説明できる？

なんて言ってやれば、また智瀬は“笑って”くれる？



「さと君、ウソだよな？」　そう問う智瀬の瞳には、疑いの色がない。

まるで、俺が『ウソ』だと言ってくれる。　そう信じているかのよう。

智瀬は真っ直ぐ俺の瞳を見つめていた。

「くう・・・」　俺はそんな俺のことを信じて疑わない瞳を、直視できなかった。

思わず、目を逸らしてしまう。

だが、しかし。　その行為は“それ”の否定と同意で。

ウソではない。　そう言っている様なものだった。

暫しの沈黙の後、俺はやっとのことで「ごめん…智瀬…」と呟いた。

## 5章Eパート

自分の希望を『否定』されてしまったようなものだった。

智瀬は後退り、俯いた。

「ウソなんだよね…？ さと君も夏美ちゃんとグルになって私を騙そうと…」

『希望』に絶る。

「まだ分かんないの？ ウソじゃないんだってば」夏美が“それ”を

勝ち誇ったように打ち砕く。

「ウソ…だよ…だって、キスなんて彼女の私ですらまだ…そ、そう…！！」

さと君の彼女は私！！ 私なんだよ?! だから夏美ちゃんとするわけ…」

続ける。 そうしないと、心が壊れてしまうから。

俺は…。

「てかさ、分からない? こうやって、今抱きついてもお兄ちゃん  
は拒まない。」

普通さ恋人の前でこんなことしたら、いくら妹でも遠慮するとか

離すとかするじゃん」

「……………」

「お兄ちゃんが、あたしに優しくしてくれる。これが、あたしを好きな証拠なの。」

「……………」

「一理ある　と感じたのか、智瀬はうなだれた。

違う…俺は夏美が好きなんじゃない…違うんだよ…っ

喉がカラカラに渴いていた。　言いたい言葉が頭に浮かんで消えていく。

口から、出てこない。

「……………」 智瀬は、暫く黙り込んでいたが唐突に顔を上げた。

そして、再び俺の瞳を真っ直ぐ見つめる。

その瞳には、まだ光が消えてなかった。

「ね？ 分かったでしょ？ お兄ちゃんはあるたじゃなく、あたしを」

「夏美ちゃんは黙ってて！！」

夏美の言葉を、強い口調で制する。

驚いた、滅多にこんなに強い口調にならない智瀬が。 　こんな強く怒鳴るなんて。

「な、なによ…」 そんな智瀬に驚いたようにキョトンとする夏美。

智瀬は、問うた。

「さと君が本気で好きなのは、誰？」

「俺が…好きな…」

そんなの…。

「そう、クラスメイトとか兄妹とかそんなの関係なく。

『一人の女の子』として、一緒に居たいのは、誰？」

その言葉は、まるで中途半端な俺を論さとしているようだった。

「俺が好きなのは…」 そんなの…決きまってる。

決きまってるのさ…。でも、言いうのが怖こかった。

こんな事した上に、傷つけると分かっていてこの言葉を言いうのは。



刹那、俺に抱きついていてる夏美の腕にグッと力が込められたのを感じた。

でも、傷つけても。それが後悔する結果になろうとも俺は、言わなければならぬ。

決断をしなければ、ならなかった。

優しいウソは…もうついてはいけぬから。

だから言つのだ。

「俺が好きなのは

」

その言ノ葉は、“その子”にとつて何よりも鋭い刃になり

生んでいった

それは忘れることのできない、“痛み”を

## 6章Aパート

コンコンコン。

お兄ちゃん、居る？

そんな風にノックしてから、お兄ちゃんの部屋のドアを開けた。

どつちやら今は出掛けているみたい。

なんだ、ちょっと寂しいな。

そんな風に心の中でため息をついて、部屋を見渡す。

この部屋、凄く良い匂いがする。

お兄ちゃんの、匂い。

天気もいいしね、窓から射す光が暑い位。

ふと、机の上に存在感有り気に置いてある写真立てが目に入る。

「……………」

その写真立ての“中”を見つめる。

誰？　この人。　お兄ちゃんの横で、凄く楽しそうに笑ってる女の子。

……………キモい。　ハッキリ言ってキモい。

あたしの方が何倍も、何十倍も可愛いじゃん。

なんで、こんな人がお兄ちゃんの横で笑ってるの？

オマケに腕まで組んじゃって。 何してるわけ？

「・・・ああ、そうか」 この人。

ちせ とか言ったっけ。 あたしからお兄ちゃんを『奪った』人。

何へラへラしてんのよ。 何イチャついてくれちゃってるのよ。

そんなにあたしが苦しむのが楽しい？？ そんなにあたしが

ムカつくのが楽しいわけ？？

ガシャ！！

急に腹が立ってきた。だから、その写真立てを壊した。

写真を取り出し、お兄ちゃんのみ所だけハサミで切り抜く。

あの女は、要らない。だから、ゴミ箱へポイ。



じつぶぶ……ぞきみろ。　凄く気持ち良いわ。

お兄ちゃんの写真、落とさないようにポケットの中にしてまっ。

「あ……」

クスッ。　お兄ちゃんったら、服脱ぎ散らかして行っちゃったのね。

ベッドの上に、乱雑に寝巻きが散らばっていた。

そんなに急いでたのかな？　もう、それならあたしがちゃんと起こしてあげたのに。

水臭いなあ、お兄ちゃんは。

あたしなら、お兄ちゃんにならなんでもしてあげるのに。

「つぶつぶ……でも、頼られているみたいで嬉しい」

散らかっている寝巻きを拾い上げ、下に降りて風呂場の洗濯機へ。

「いいこと、しちゃった。お兄ちゃん喜んでくれるかな」

気分良く、お兄ちゃんの部屋へ戻る。

「えいつ」 バフッ。 勢い良くお兄ちゃんのベッドへとダイブ。

お兄ちゃんの、匂いがした。部屋の匂いよりも、さらに強い。

あの日、一緒の布団の中で感じた匂いと同じくらい。

・・・でも、ちょっと足りないかな??

夏場だからだよな。

ちょっと汗臭いところもあるけど、それがまたあたしを“蒸気”させる。

「お兄ちゃん・・・逢いたいよ・・・」 ポツリ。

それは、本音？ たまたま出た言葉？ ううん、本当は分かってる。

・・・でも。。。

目を閉じる。

暗闇の中。

お兄ちゃんの温もりが伝わってくる気がして。

なんだか、とつても。

∴温かった。

【8月8日】

ミーンミーンミーンミーンミーン……。

ミーンミーンミーンミーンミーン……。

真夏の太陽、青空の下。 蝉の鳴き声が五月なごい蠅く響く。

そんな中、俺は。

「やべえっ…遅刻だあっ」

昨日と同様、息を切らしながら智瀬の家まで駆けていた。

昨日、約束したんだ。『10時までに智瀬の家に行く』と。



だが、いざ起きてみたら無惨にも時計は9時30分を過ぎていた。

慌てて起き、寝巻きをベッドの上に投げ捨てて普段着に着替える。

これも昨日と同様に、飯も食わずに家を飛び出した。

までは、良かった。

昨日の疲れもあり、おまけに飯を食べていない俺は完璧にスタミナ切れになっていた。

「や、やべえ……このままじゃ流石に間に合わない……」

肩で息をしながら立ち止まる。

全身にじんわりと汗をかいていた。

汗を拭い、携帯を取り出す。

「仕方ない……智瀬にメールすつか……」

遅れる と言メールを入れようと思ったのだ。

最初からこうすれば良かったんじゃないか　と自問自答してみたが

今更なので考えるのをやめる。

……返事はすぐにきた。

“うん、平気だよ。　気をつけて来てね、待ってるから。”

「……………」

智瀬は優しいな、昨日あんなことがあったのに。

まだこんな俺に優しい言葉をかけてくれるのか。

昨日、結局俺は彼女ちせを選んだ。

そう、俺は答えを出した。

「俺が好きなのは、智瀬だ」と。

「・・・!？」 夏美はビクンと体を震わせた。

「さと君？ 本当？ 私を選んでくれるの？」

「ああ、本当だ。」 俺は真っ直ぐ智瀬を見つめて言ったんだ。

今度は目を逸らさずに、ただ智瀬だけを見ていこう。そう心で誓いながら。

・・・その後夏美は無言のまま何処かへ走り去ってしまった。

でも、家にはちゃんと帰ってきてたし夕飯にも現れた。

ただいつもと違うのは、目が少し虚ろで俺に一切話しかけてこなかった事だ。

まあ、俺は夏美を選らばなかったわけだし。

またいつもみたいにムクれているだけなんだろうと思っ

あまり気にも留めていなかった。

そんな夏美を心配して、智瀬は夜中に電話を掛けてきてくれた。

「夏美ちゃん…平気？」 と心配そうな声色で言うのだ。

全く、智瀬は優しすぎるよ。

「ああ、思ったよりは平気そうだ。」 俺がそう答えると

「良かった…私の所為で何かあったらどうしようかと…」

と安堵の息を漏らすのだった。

「……………」

違う。 智瀬の所為にはならないんだ。 絶対にならないんだ。

俺が・・・俺の・・・。

そんな事をボンヤリ考えている受話器越しの俺を見透かすように智瀬は言ったんだ。

「ねえ、明日“家交際”<sup>デート</sup>しよ?」と。

そして、今智瀬の家に向かっているわけだが。

暑い...遠い...。 なんてこった。

とはいえ、昨日一人が味わった苦しみに比べたらこんな屁でもない。

そう感じられた。

「ふう……よしっ」 気合を入れなおすと俺は再び歩を進めた。



## 6章Bパート

「……………」

シャワー……………。

俺は今、何故か智瀬の家の風呂場を借りてシャワーを借りている。

それと言うのも、智瀬の家に入るなり汗だくの俺を見て智瀬の母さ

んが

『どうしたのよ？ 汗だくじゃない？ 良かったらお風呂使って！』  
と横でキョトンとしている智瀬を他所に、半ば強引に風呂場に押し込めたのだ。

「まさか、昼間から彼女の家の風呂に入ることになるとはな……」

苦笑い気味に呟いた。

「さと君……？ 今居るんだよね？」

風呂のドアが遠慮がちにノックされた。

「い?! ち、智瀬か?!」  
いきなりの訪問者に驚く。

「うん、私……。 ちょっと入ってもいい……。？」 これもまた、遠慮がちに。

「え……。あ、でも俺今……」

「私は……。気にしないから……」 ガラッとドアが開かれる。

ちよっ！ 待った！！ 風呂ってことは智瀬も……。？！

待って、心準備が……。！！

などと、慌てふためいたのも束の間。

智瀬は律儀にも全身をバスタオルで隠していた。

「あ……」 ちよっとホっとしたような。 かなり残念だったよ  
うな。

「前……隠さないんだね」 智瀬は恥ずかしそうに視線を宙に逸  
らす。

「あ……」  
「うわっ」

とっさに前をタオルで隠す。 恥ずかしい……なんて間抜けなん  
だ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「んしょ、んしょ」 智瀬は俺の背中を流してくれていた。

「……………」 その感触を確かめながら思った。

智瀬は、何を考えているんだろう？　いくらタオル巻いてたって普通の

智瀬なら恥ずかしくて絶対にこんなことしないのに。

『さと君のエッチー！』　そう言ってムクれるはずなのに。

たまにこうやって智瀬の家の風田を借りることはあったが

その時だって、智瀬は一緒に入ろうだなんて思わなかっただろうし、しなかった。

・・・それにしても、こころやって女の子と風呂に入るなんて。

小さい頃一緒に夏美と入ったきりかもしれない。

そして、俺は夏美と布団で会話して・・・キス・・・して・・・

その温もりが・・・怖いほど、温かくて。

いかん、俺はまた夏美の事を思い出している。

あいつは妹だ。 それ以上でもそれ以下でもないんだ。

今は、智瀬が隣に居てくれる。 だから今はこいつだけを見ていくんだ。

「さと君の背中って・・・こんなに大きかったんだね」

手を止め、唐突に口を開く。

「ん・・・あ、ああ」



「そういえば、さと君の背中。じつくりと見たことなかったな・・・」

「そう、だったな。智瀬の前で脱ぐことって体育の時くらいだったもんな」

「夏美ちゃんは・・・毎日、この背中を見てきたんだね・・・」

なんで今夏美が出てくるんだよ・・・。

「・・・それはどうかかな？少なくともあいつの前で脱いだことはないぞ？」

あ、まあ。小さい頃は抜かしてな」

「・・・」

そんな風に冗談めかして言うと、智瀬は何故か黙り込む。

「あ、ごめん。俺変なこと言ったか？」

「うづん、そっじゃないの。」 智瀬は俺の背中にピッタリと頬を寄せた。

「ち、智瀬……？ 何やって……」

「ちょっと、妬げちゃった。羨ましいなあ。」

いつも一緒に居れるって、いつもこの背中を見つめられるって。」

161

遠慮がちに、ごめんね。 と最後に付け加えて。

ドキッ、俺の心臓が一気に跳ね上がった。 その声が、言葉が可愛かった。

同時に、申し訳なく思った。 やっぱり昨日の事、気にしてるんだ。

頑張っ てニコニコして、いつもの通りに。 変わらないように無理して振舞って。

“またいつもの二人”に戻れたら、そんな風に思ってるんだろう。

だから、きつと恥ずかしいのに無理して風呂場にまで……。

「なあ、智瀬……。」

「……………」 智瀬からの返答はなかった。

「智瀬……？」 俺が心配そうに振り返る。

……………パタッ。

智瀬は俺の背中を滑るように倒れこんだ。

「ち、智瀬?! 大丈夫か? おい、しっかりしろ!!」

「はぁはぁ・・・」 智瀬は苦しそうに顔を蒸気させていた。

「くっ・・・しっかりしろっ」

とにかく、智瀬を部屋まで運ぼう。俺は智瀬を抱え上げ、風呂場を飛び出した。

持ち上げて分かったが、智瀬はこんなにも軽かったんだ。

.....。

.....

.....

部屋へ運ぶよりも大変だったのは、智瀬の母さんに事情を説明する事だった。

俺自身、智瀬が何故倒れたのか分からないから

とりあえず、ありのままを話した。

少しの間、不思議そうに首を傾げていたが

『聡くんがそんな嘘つくはずないもんね』と信じてくれたのだった。

「智瀬・・・」 智瀬をベッドに寝かせて顔を見つめる。

先程よりは、穏やかな表情になっていた。

今はスヤスヤと寝ている。

コンコン。 部屋がノックされて智瀬の母さんが入ってきた。

「智瀬ちゃんの様子はどうかしら？」

手には麦茶が乗っかっているお盆を持っていた。

「さっきよりは落ち着いたみたいで。 今は寝ているみたいです。」

「そう、良かったわ」

智瀬の母さんはそう安堵の息をつくくと、ベッド横のテーブルにお盆を置いた。

そして、心配そうに智瀬を見つめて言うのだった。

「ここ数日、あまり寝てなかったみたいだから。この娘」

「え、そうだったんですか？」

「ええ、何か悩んでるみたいだった」

「・・・・・・・・」

知らなかった。智瀬がそこまでの“何か”を抱え込んでいたなんて。

そんな俺に、智瀬の母さんは言うのだった。

「聡くん、この娘の彼氏なのに何も聞いてないの？？」

グサリ。まるで鋭い槍のように。

その言葉は俺の心に突き刺さった。

彼氏なのに。 そう・・・彼氏のくせに・・・。

俺は智瀬に何かしてやれたか？ 何かひとつでも、助けてやれたのか？？

悩みひとつ・・・聞いてないじゃないか。

何も聞かず、本人も話さないから訊こうともせず。

ただ、ニコニコしながら俺の隣をついてくる。 その『側』の智瀬だけを。

それしか、見ていなかったんじゃないのか？

心の奥に閉まっておいた、負の部分。 俺は見落としていたんじゃないのか？

そう、それはきっと夏美にも言えることで。

俺は、何一つとして。 “二人”を理解していないじゃないか。

なんて・・・情けないやつなんだ・・・それでも俺は・・・。



「ごめんね、変なこと言つて。別に貴方を咎<sup>とが</sup>めている訳じゃないの。

あ、喉渴いたでしょ？ 良かったら麦茶飲んでいってね。

それと、智瀬ちゃんが目を覚ますまで・・・傍に居てあげて。」

「・・・はい」 智瀬の眠る顔を見つめながら、静かに答えた。

「・・・よろしくね」 智瀬の母さんは俺の肩をポンッと叩くと部屋から出て行った。

「ごめん・・・智瀬・・・俺・・・」

無性に情けなくなつて涙が零れ落ちた。

なんで泣いてるかなんて分からない。

後悔？ 苦しみ？ 悲しみ？ それとも、自己嫌悪？

分からない。

ポロポロと。

頬を伝う涙、その軌跡は何処へと続いているのだろうか……。



## 6章Cパート

「……………泣いているの？」

ふと、そんな声が聞こえた。

いつの間に目を覚ましていたのか、寝たままの智瀬が心配そうな顔でこちらを見つめているのに、そこで初めて気がついた。

「これは……………あはは。なんでもないんだ！目にゴミでも入ったのかな」

必死に言い繕う。

「さと君……………無理しなくていいよ」

そんな俺に智瀬は俺の顔に手を伸ばし、頬を伝う軌跡を人差し指で

スッと優しく、拭ってくれる。

ズキン……………無理してるのは……………。

「無理してるのは、智瀬の方じゃないか……………」思わず口にしていた。

「……………無理なんかしてないよ？」

「最近、あまり寝てなかったんだろ？」

それに、何か悩んでるみたいだって奈美江なみえさんも言ってたぞ？」

奈美江さんとは、智瀬の母さんの事だ。

「……………」

智瀬は、困ったように「お母さんのお喋り」とボヤくとため息をつ

く。

しかし、すぐに微笑み

「ちょっと、体の調子が悪くて。心配かけてごめんね?」

と冗談めかしたように舌をペロっと出す。

「本当か? 本当にそれだけなのか?」

「え? どうしたの? 急にそんな・・・」

「質問に答えてくれ、本当なのか? 本当にそれだけなのか?」

「・・・・・・・・・・うん」

言葉とは裏腹に僅かに開いたその間は、その質問を否定していた。

少なくとも、俺にはそう聞こえたし今の智瀬に起こっている事は『それだけ』だと

どうしても思えなかった。

「なんでだよ……」

呟き、俯く。

「え……？」 智瀬は困惑したような声色。

「なんで嘘なんてつくんだよ……俺、智瀬の“彼氏”なんだぜ？」

「……」 その言葉に返答はない。

なんで俺に優しい嘘なんてつくんだよ？

なんで相談の一つもしてくれないんだよ？

そんなに、俺って頼りない存在なのかよ？

そして、なんで俺なんかになんか“優しい”んだよ……？

問いかけてだけが、心の中に浮かんでは消える。

取捨選択するように、どんな言葉を口にしたらいいのか。

頭の中でグルグルと検索・破棄を繰り返す。

どうしたらいい？ どんな言葉をかけてあげれば智瀬の力になってあげられる？

「……………」 少しの間、二人の間に沈黙が降りた。



「ねえ、さと君」　そして、その沈黙を破ったのは智瀬の方だった。

「ん？」

「なんで私が嘘をついてるって思うの？」

「そりゃあ・・・俺は彼氏だからな。　智瀬の考えてることはすぐに顔に出る。」

「・・・・・・・・」

分かってる、今まで智瀬の背負う“何か”から目を背けていたくせに。

向き合おうともせず、ただ笑い合っているのが幸せだと。

傷つくこともなく、お互いの嫌な所も見ようとせせず。

智瀬だけじゃない。夏美の気持ちにだって、目を背けて来た。

知っていたくせに、俺は智瀬とただ『傷つかずに、彼女も妹も傷つ  
けずに』などと

甘ったるい考えをしていた。

こんな俺が言うのは、お門違いなのだ。十分自分でも理解して  
いる。

でも、最早理屈じゃないんだ。

2年間、一緒に居たからこそ分かる智瀬の『変化』。

仮にもその間一緒に連れ添った仲だ。分かるからこそ、ようやく  
気がつけた。

目を背けてはいけないと。 傷つく事から…逃げてはいけないと。

これは、今まで何もしてあげられなかった俺が智瀬にする断罪であり

そして、何かをしてあげたいという本当の気持ちなんだ。

唐突に、本当に唐突に。

智瀬は天井を見つめ始めた。 そして、俺に問う。

「8年前の「ト」…覚えてる？」

と。

「8年前…？何かあったか？」

8年前。俺はまだこの町には居なかった。

今から4年前、俺は当時から2、夏美はまだ小学6年生の頃。

俺たち家族はまだ父さん、母さん、夏美、俺。4人で柏市町に住んでいた。

当時の俺の両親に対する印象は、仲良い“親友”のような夫婦だった。

何をする時も一緒に、本当に仲が良かった。

きつと、この二人はずっとこうやってバカみたいに仲良くやっていくんだろう。

そう思っていた。

けれど、その年の8月。とても暑い日、それは突然やってきた。

父さんと母さんは、今までに見たことの無いくらいの喧嘩をしていた。

喧嘩の原因は分からない。俺は怖くて、ただ二人が何かを言い合っている。

それだけで怖くて、俺は耳を塞ぎ、自分の部屋で蹲っていたから。

夏美はそんな俺に寄り添って、ずっと頭を撫でてくれたのを覚えている。

…結局、その喧嘩の所為で二人の溝は深まり10月になる頃には別居する事に。

母さん曰く、『子供のことを考えて籍は外さない』んだそうだ。

父さんは夏美を引き取り柏市町にそのまま残った。

母さんは俺を引き連れて逃げるように家を飛び出した。

そして、この町に引っ越してきた。

今年、結局夏美もこっちに来たので事実上父さんだけが別居状態になっている。

その頃の記憶は残っている。出来れば思い出したくない過去。

けど、それは4年前の話だ。

8年も前のことは、あまり覚えていない。

その頃の記憶が、すっぽりと抜けてしまっている。

「・・・覚えてないんだ・・・ね・・・」

智瀬は何故か悲しげに視線を宙に漂わせている。

「ごめん・・・ていうか8年前って俺らが出会う前じゃなか。

なんで智瀬がそんな頃の事を訊くんだ？」

そうだよ、智瀬は高校からの知り合いじゃないか。

2年前に初めて会った人に“8年前の事を覚えてる？”なんて、なんか変だ。

「……………」 智瀬はその問いには答えなかった。

代わりにゆっくりと体を起こし、俺を見つめた。

「さと君、明日空いてるよね？」

そう無理矢理に微笑んで。

「お、おい。起きてても大丈夫なのかよ？」

「……………」



智瀬は大きな瞳をこちらに向けた。

その吸い込まれそうな瞳の奥で『質問に答えて』と訴えかけているように思えた。

## 6章Dパート

“真つ暗闇の景色の中、一人佇む。 心の中の誰かが語りかけてくる。”

『それでいいのか?』と。

『このまま負けていていいのか?』と。

良いわけ…。 でも、あたしはそれを望んでもいいの?

黒い影が、近づいてくる。 あたしの耳元に口を近づけてそれは不気味に笑った。

『良いに決まっている』と。

あなたは…。誰? なんであたし、こんな所に居るの?

お兄ちゃんは……どこ？ お兄ちゃん……怖いよ……  
暗いよ……。

影は、<sup>それ</sup>心を見透かす様にあたしに語りかけてくる。

『お兄ちゃんは…居ないよ』と悲しげな声で。

いない……？ どこに行っちゃったのお……？

急に心臓の鼓動が速くなっていくのを感じた。

今、あたし恐怖してるんだ。 居ないって聞いただけで…怖  
くなっただ。

それがハッキリ分かるほどに、心の中に切ない気持ちが入り込  
み上げてくる。

『……あの女』

影は指を差した。その先には仲良さそうに微笑を交わし、  
寄り添いながら

肩を寄せて歩いていくお兄ちゃんと・・・《あの女》。

その横に、当然だけど・・・。

『あそこに、あなたの居場所はないよ』と影は冷たく言い放  
つ。

え、イヤだよ。居場所がないなんて、イヤだよ・・・。

『嫌なら…どうするの?』 どうするって・・・?

『わかんないの?』 ……。

『本当は分かってるんじゃないの?』 え・・・?

『あなたの後悔のないように・・・行動すればいいのよ』

そう言うと、切なげに笑ったような気がした。

あなたは・・・誰なの？　なんでそんな事・・・。

影は応えない。

その刹那、視界は開けていった。　眩しくて目が眩むほどに

”

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・

智瀬は答えて欲しげに俺を見つめていた。

そんな真剣に見つめられると、少し困ってしまふ。

「あ、ああ。 勿論空いてるけど」

「本当？　じゃあさ、明日二人で“緑夏祭り”行こうよ！」

智瀬はその大きな瞳をキラキラと眩しい位に輝かせた。

緑夏祭り。　それはモリコーで行われる年に一度の夏祭りのことだ。

モリコーは大きな公園だ。

入り口入ってすぐの遊具が置いてある広場の奥の方。

それは、この前夜のモリコーで夏美を見つけた場所。

そこは『散歩コース』と呼ばれていて、奥の方にある展望広場まで

道なりにずっと煉瓦れんがブロックで舗装された道が続いている。

普段、その道はジャージ姿のお兄さんや近所の主婦たち何人かで

井戸端会議の場として使われている。

その広く、長い散歩コースに恒例の“チョコバナナ”や“リンゴ飴”などの

出店が軒を連ねる。毎年、賑やか過ぎるくらいの人が集まって

それぞれの買いたいものを買ったり、射的などで一喜一憂したりする。

そして、最後には展望広場から見る約2000発打ちあがる花火大会。

何も無いこの町の、まさに町を挙げての一大イベントだ。

余談だが、町長曰く。

『祭りは緑（自然）の中でこそ相應しい。自然の中でやるからこ



『楽しい』

だそうだ。とにかく自然が大好きらしい。

そうか、緑夏祭りは明日だったのか。

ここ数日のゴタゴタで、すっかり忘れていた。

断る理由など、なかった。

寧ろ、俺も智瀬と行きたいと思った。

「いいよ、“二人きり”で行こうか。」と、そっと智瀬の頭を撫でてやる。

「やった・・・えへへ」 智瀬はくすぐったそうに笑った。

「こうやってまた微笑んでくれるのなら…俺はいくらでもこうしたい。

もう…あんな智瀬の顔なんて見たくない。

「……………」

「……………」

少しの間俺たちは見つめ合った。

今までも、何度もしてきた行為。

なのに、今日はやけにドキドキする。いつも以上に意識してしま  
う。

「ねえ……………おと君？」

「ん……………」

「夏美ちゃんにした事と、同じ事…してほしい」

恥ずかしいのだろうか、そんな遠まわしな言い方をして頬を赤くする。

夏美にしたこと…それはキス。

俺だって、したい。いや寧ろずっとしたかった。

でも“変化”が怖かったから敢えてしなかった。

…だが俺たちは変わってしまった。

『夏美』の告白によって、変わってしまった。

だから訊いた。

『俺で…いいのかよ』と。

やはり、あんな事をした手前すんなりキスをするなんて少し気が引けた。

罪悪感・嫌悪感。 暫くは俺の中でモヤモヤとしているに違いない。

「さと君が・・・いいの」

智瀬はベッドから這い出てくる。そして俺の前に少しぶらつきながら立った。

「してほしいから・・・言うの。 お願い・・・さと君・・・」

部屋の空間の中に、消え入りそうな声だった。

「・・・」 俺も立ち上がり、両手で智瀬の肩を掴む。

「初めてだから・・・優しくしてね」 そっと瞳を閉じた。

「智瀬・・・」 俺も瞳を閉じて、智瀬の顔に自分の顔を近づける。

息のかかる位の距離、今まで踏み出せなかった距離。

そこに俺と智瀬は、やっと進み出せた。

トクン・・・トクン。

智瀬の唇に近づくほど、智瀬の甘い香りが鼻をくすぐる。

とても、心地いい。 温かくて安心する、そんな感覚を覚えた。

トクン・・・トクン・・・トクン・・・。

…唇が重なり合う、まさにその時だった。

「!?!」

ピンポーン　ピンポーン

いきなり、家の呼び鈴が鳴らされた。

「……………!!」　その音に、反射的に俺たちはお互いの体を

離す。

まだ心臓がバクバクしている。

ピンポーン　ピンポーン　ピンポーン　ピンポーン

呼び鈴は連呼されている。

「あれ……お母さん居ないのかな？」

智瀬が不思議そうに首を傾げた。確かに、誰かが出る気配はなかった。

「んー……つか、うるせーな。誰だよ、こんなに呼び鈴連呼するなんて」

呼び鈴は4回、5回と連続して鳴っていて止む気配はなかった。

なんだ？ 訪問者はそんなに急いでいるのか？ この急かし様は普通じゃない。

「ちょっと、私行ってくるね」 智瀬はそう行って部屋を出て行った。

「………ていうか、なんつうタイミングだよ」

そう心の中で毒つく。

でも、内心少しだけホっとしている自分がいた。



唇が重なり合おうという瞬間

何故か俺の<sup>まぶた</sup>瞼の裏には夏美の泣き顔が浮かんだから……。

## 6章Eパート

それから少しして、智瀬が戻ってきた。

「……………」 その表情は何故か浮かない顔だった。

「おかえり。 誰だったんだ？」

俺は智瀬のベッドに腰掛ける。

「え、うん。 ちょっとした知り合い」と、智瀬は笑って誤魔化した。

「・・・大丈夫か？　なんか顔色悪いぞ？」

「え、うん？　平気っ。　まだ少し疲れが残ってるだけだと思う」

微笑み、ベッドの横に置かれた盆から

時間が経ち、すっかり汗をかいているコップを手に取ると中身を一気に飲み干した。

「さと君も飲みなよ！」　もう一つのコップを手に取り俺に差し出す。

「あ、ああ・・・。」　ヒンヤリと汗をかいたコップを受け取る。

そして一口、口に運んだ。

喉が渴いていたのでその麦茶はぬるかったけど美味しく感じられた。

「さと君、少しじっとしててね」

飲み干したコップを盆に戻し、俺の横に腰掛ける。

「ん？　なんかするの？」

「何かつて…まあ…そんなとこ」　呟き、寄り添うように俺の肩に頭を寄せた。

「智瀬・・・？」

「いめん、少しの間。　このままで居させて。」

今だけは、さと君を感じていたいから。　そう付け加えて。

「謝らなくて、いいから」 智瀬の小さな手を握る。

少し力を入れたら折れてしまいそうなくらい“か細く”、小さな手。相変わらずの冷え性で、夏だというのに手先は少し冷たくなっている。

その小さな手は、俺の手を本当に小さな力で握り返してきた。

その時間は、本当に俺たちだけだった。

あの頃に、戻ったみたいだった。 その時は。

その時だけは不安なんか、微塵も感じられなかったんだ。

それは……俺だけだったのだろうか。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

それから暫しの間、俺たちは寄り添っていた。

俺は離れたくなかった。離れてしまつたらもう戻れなくなる。

何故か、そんな気がしたから。

「智瀬・・・？」　俺は智瀬に話しかけた。

「・・・・・・・・・・」　けれども返事は返ってこない。

「おい、智瀬？」 智瀬の顔を覗き込む。

スースーと気持ち良さそうに、寝息を立てていた。

「そっか、疲れてるんだもんな」

その寝顔が、不謹慎にも可愛いなと思い『何考えてるんだ』と心の中  
中で苦笑する。

「おやすみ、智瀬。」

俺は智瀬を起こさないようにベッドに寝かせると静かに部屋を出た。

.....。

.....。

「智瀬：本当に俺の事好きでいてくれてるんだな……」

外に出た俺は、早くも傾きかけている太陽を目を細め見つめて呟く。

「俺は、その気持ちに応えてあげれてるのかな……」

自信は、もうかなり前になくなっていた。

夏美に対して、そして何より智瀬に対して。



これからどんな態度をとっていったらいいのか。分からなくなっていた。

「・・・帰るか」

智瀬は寝ているし、起こしたらマズいよな。

ここに居ても仕方ないし、腹減ったから帰ろう。 うん、もう帰ろう。

「.....」

ぐちゃっ　ぐちゃっ

『ねえ、なんであんな女産んだの？』

*	
*	*
*	*
*	*
*	*
*	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*
	*

『あんな女、生きてる価値ないよね？ そう思わない？』

ぐちゃっ　ぐちゃっ

「.....」

『さっきから黙ってないでさあ、なんとか言ったらどうなの？』

「.....」

『あっはは。さっきの威勢はどうしたの？』

あ　の　“　娘　”　を　守　る　ん　じ　ゃ　な　か　っ　た　の　お　？　？  
あ　っ　は　は　は  
『ははははは...』

「.....」

ぐちゃり、ぐちゃり

『まあ、こんな姿になっては…もう“娘”には逢えないよ  
ねえ？』

守るなんてえ…クスッ。 できないよねえ？』

「……………」

『あはははははははははは…！！！！』

邪魔者は、皆消えちゃえ！！ あたしの前から、全部消  
えちゃえ！！！！』

笑い声が響く。

あははははははは…あはは…はあ。

一頻りひとこもり笑ったから、懲らしめたからもつ許してあげよう。

あの女は、もっとあたしがじつくりと懲らしめてあげる。……。

『待っててね…智瀬先輩…うふふふふふ、あっはははははははははは』

紅い、紅い景色にあたしは独り。 高笑いをしていた。

\*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「ただいま〜っと」 家に入ると母さんがやってきた。

「おかえり、夏美ちゃんを知らない？」

「んいや、今日は見掛けてないけど。」

「そう、なんか昼間いきなり出かけていったもんだから……どこに行つたのかしらね」

母さんはボヤキ、台所に引っ込んでいった。

「またあいつ帰ってないのか……」

いつもの俺なら心配になって捜しに行っていただろう。

でも、今はなんとなく顔を合わせたくなかった。

だから、俺は捜しに行くとは思えなかった。

部屋に戻ると、俺は異変に気がついた。

「あれ？」 机の上に置いてあった写真立てがなくなっていた。

おかしいな、どっかに落ちたのかな？

そう思い、床を見渡してみるが見当たらない。

…と思いきや、机下にあるゴミ箱の中に“それ”はあった。

「ん？ なんだよ、これ」 けれども、そこにあったのは

バラバラになった写真立ての枠部分と何故か智瀬の部分だけ切り取られた写真の一部。

気味が悪かった。 なんてこんな所に…。

しかもまるで誰かが意図的にやったかのような光景。



俺の部分がなく、智瀬の部分だけが捨てられていた。

もう、こんなことする心当たりは一人しか居なかった。

俺は急いで携帯を開くと、夏美の携帯にコールする。

「夏美・・・なんでこんなことするんだよ・・・」

プルルルルル・・・プルルルルル・・・。そのコールは異常に長く感じられた。



## 7章Aパート

「・・・・・・・・」

何回コールしたかなんて覚えていない。

『お兄ちゃん？ どうしたの？』 少しして、夏美はいつもの声で電話に出た。

「夏美、お前今日俺の部屋に入ったか？」

『入ったよ』 即答だった。

「やっぱり・・・机の上の写真立て、お前の仕業だな？」

『そうだよ』 これもまた即答だった。

「なんでこんなことするんだよ？ ひよっとして、智瀬に対する復讐でも」

企んでいるのか？」

『復讐なんてしないよ。』

「本当か？」

『お兄ちゃんは、本当にあの女が好きなんだね』

受話器の向こう側で、夏美はため息をついた。

「彼氏だからな、当然だろ？」

『……でもあたしは今まで誰よりもお兄ちゃんの傍にいた。

傍に居て、ずっとお兄ちゃんを見てきたんだよ？』

だから譲れないんだ。 と夏美は微笑んだ、そんな気がした。

『お兄ちゃん、写真大切にするね。　夜も胸に抱いて寝るから・・・』

あ、でもお兄ちゃんがしてほしいなら本当にお兄ちゃんの体を胸に・・・。』

「何言ってるんだよ、お前は妹だろう？」　そう妹だ、血の繋がった。

『なら、何故キスしたの？』　夏美の声が冷たく凍りつくのを感じた。

まるで、俺のことを蔑んでいるかのような。

「それは・・・」　それを言われると、反論できなくなる。

『でも、大丈夫。　あたしはお兄ちゃんのそんな所も好きだから。

優柔不断で、誰にでも優しくて、こんなあたしを“愛して”くれて。

良いところも、悪いところも、全部好きだよ。　お兄ちゃん。』

「夏美……」なんて言って良いのか分からず。

『あたし、お兄ちゃんのためならあ……なんでもするんだから。』

楽しげなその声で、電話は切れた。

一人部屋の中、俺は携帯の画面を

時間経過でバックライトが消えた後もじっと見つめていた。

そして、急に切ない気持ちになった。

俺は……最低だ。

【8月9日】

結局、昨夜は夏美は帰ってこなかった。

俺との電話後、夏美は母さんに『友達の家泊まるから心配しないで』と

連絡を入れていたらしい。

母さんはそれで納得したらしいが、もちろん俺はそんなの信じていなかった。

いや、本当に友達の家泊まって楽しくやっているのならそれでいい。

寧ろ、これが俺の杞憂きゆうであってほしいと思う。

でも、ここ数日の出来事や夏美の様子を見るとそうは思えなかった。

さて、今日は緑夏祭りの日だ。



天気も良好。

俺は灰色の浴衣姿で、夕日の中を一人歩いていた。

せつかくの祭りだ、浴衣を着ていかなければ意味がない。

きつと智瀬も浴衣を着てきてくれるはずだし。

それが少し楽しみだったりもする。男だったら大体の人は理解できるとは思う。

祭りは日が暮れるより少し前、6時30分からの開始になる。

俺の家からモリコーはそんなに離れていないのでゆっくりと歩いていく。

正直、祭りに行く気分ではなかった。

でも年に一度の行事だし、智瀬も楽しみにしている。

だから、今日くらいは今までの事を忘れて楽しもうと思った。

「……………」

俺はまるで気づかなかった。

後ろを、同じく浴衣姿で追いかけてくる少女の存在を。



・・・遠くに、小さな子供が手を繋いで歩いているのを見かけた。  
多分、見た感じ兄妹だろうか。男の子が小さな女の子の手を引いている。

パツと、女の子はいきなり転んでしまった。

そして『痛いよあ、お兄ちゃん』と泣き叫ぶ。その声はここま  
で聞こえてくるくらい。

その声は、遠い記憶の中。まだ幼かった頃の夏美の泣き声に怖い  
くらい似ていた。

俺たちもこんなことがあった気がする。でも、その時俺はどうし  
たんだっけ？

「ちゃんと掴まってないからだぞ？」 男の子は女の子に手を差し出す。

「だってえ……」 鼻を嚙りながらも、しっかりと女の子はその手をとった。

「もう離すんじゃないぞ？」 男の子が女の子の頭を撫でてやると嬉しそうに微笑む。

「うん！」 女の子はすっかり泣き止み、二人は仲良く手を繋ぎ直し奥へと消えていった。

……あの頃に戻りたいと思った。

“好き”とか“好きじゃない”とか。

“妹として”とか“一人の女の子として”とか。

何も考えずに、ただ二人で笑い合っていた頃が今は物凄く遠い昔のように思えた。

なんだろ、男の子の言った言葉。なんとなく、懐かしい感じでした。

「さと君、待たせちゃった？」

いつの間に来たのか、智瀬が目の前に来て俺の顔を覗き込んでいた。

「いや、ついさっき来たところだ」 使い古されたようなそんな台詞。

でも、嘘はついていない。

「良かった、それよりさ。何か言っことない？」

智瀬はこれ見よがしにクルっと一回転してみせた。

これは、浴衣を褒める。　ということなのか？

智瀬の浴衣はピンク色で、箇所箇所に花の柄が装飾されていてなんとも可愛らしい

デザインだった。　手には巾着、足には下駄。　帯には扇子まで差してある。

「・・・・・・・・」

「さと君？　どうしたの？」

「・・・・まあ、悪くねーんじゃない？　その浴衣。」　照れ隠しに、鼻の頭を掻いた。

普通に可愛くて見惚れてました。　なんて恥ずかしくてとても言えない。

「えへへ、ありがとう。　さと君に褒めてもらえると嬉しいっ。

「この浴衣、今日の為に買ってあったんだあ」

「・・・・・・・・」

智瀬、俺と行けるかも分からなかったのにこれを買っていたのか。

それとも、俺がOKすると心のどこかで確信でも持っていたのだろうか。

なんにしろ、本人が喜んでいるんだからそこでいいか。

智瀬は目を『く』の字にして「あつ」と喜んでいる。

それがまた可愛い。

「よし、中に入るうぜ。」 俺は智瀬の手を握った。



「あ……」 智瀬は一瞬驚いたように体をビクリとさせた。

「ん？ どうした？」

「んーん、なんでもないので、そう言つと恥ずかしそうに俯いてしまふ。」

「あはは、変なやつ」

「もう、笑わないですよ。 さと君の意地悪！」 智瀬はそうムクれるのだった。

「ははは、じいめんじいめん」

そう、こんなやり取りがしたかったんだ。

いつも通りで、馬鹿みたいで、とても心地いい会話。

からかわれて、ムクれてる智瀬の手を握りながら、肩を抱きながら  
過す。

この時間が。 こんなにも愛しいなんて。

屋台から聞こえる、祭まつり子こと明かりの中を

俺と智瀬は、手を繋いで歩いていく。

まるで、後に引く陰を振り払うかのように。

## 7章Bパート

\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*

うふふ・・・。

お兄ちゃんの浴衣姿ゲットお。

相変わらずカッコいいなあ

これぞ文明の利器。 携帯の写メはその場で写真に残せるから便利  
ね。

それにしても・・・どこまで邪魔する気なの？ あの女は。

お兄ちゃんの隣にいただけで不愉快だっていうのに手まで繋いじや  
つて。

ムカツクわ・・・マジで。

まあ、でも今のうちに楽しんでおきなさい。

ふふ、これがあたしからの最後の贈り物だよ。 智瀬先輩・・・。

ふふふ・・・あはははは。

\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*

「ねえ、さと君。焼きそばあるよ！」

「ああ、あるな」

「こっちには焼きトウモロコシだよ！ あ、こっちには綿飴！」

「ああ、あるな」

「あ、ジャンボ焼き鳥だって！ 美味しそう！！」

「・・・・・・・・」

「あ、チョコバナナ！ 懐かしいなあっ」

「お前な…なんで食いもんばっかなんだよ」

「だってえ・・・美味しそうなんだもん・・・」

さも買って欲しそうな視線で食べ物関連の出店の横を通る度に見つめていく。

「買って欲しいのか？」

「え、うん！」

「仕方ねーなあ。でも、全部は流石に無理だぞ？ だから一つな

」

全部買ったら破産します。間違いない。

「え、やった！ いいの？ 本当に？」 キラキラした視線をこちらに向けてくる。

「ああ、本当だ。好きなもの選んで来いよ」

「えーっと、うーんと」

智瀬は少しの間キョロキョロしていたが、何かを見つけたように俺の手を引いていった。

「本当にそれで良かったのか？」

結局、智瀬が選んだのはリンゴ飴だった。

「うん、これでいいの」 智瀬はリンゴ飴をペロペロと舐めている。

「でも、それじゃ腹減るぞ？ もっとガッツリしたもので良かったんだぞ？」

「いいの！ ていうか、さと君から買ってもらえるならなんだって美味しいから」

恥ずかしいのか、そう言って俯く。

「……………」

恥ずかしいくらいなら言っなよ。こっちが恥ずかしくなってくる  
だろ？

……………」

……………」

……………」

暫くの間、俺たちは出店を觀てまわった。

途中智瀬が「射的やってみたい！」と言い出したので射的の店へ。

結論から言つと、智瀬は下手だった。何回か挑戦してみても成果は  
ゼロ。



「あつゝ」と残念そうにうな垂れる智瀬は、なんだか可愛かった。

ちなみに去年は金魚すくい。一昨年はヨーヨー釣り。

いずれも結果は同じ。残念賞で店の兄ちゃんからおまけで貰ったものだけだった。

また少し歩いていると、智瀬が

「ねえ、さと君。ベンチに座ろうよ?」と

出店が連なっている道から少し外れた所にあるベンチを指差した。

「そうだな。少し歩き疲れたし休憩するか。」

「うん、休憩休憩!」

よいしょ、と智瀬はベンチに腰掛ける。

「よいしょって、おばさんかよ」「そう苦笑いしながら、俺も腰掛け

る。

「ねえ、さと君」 キュッと俺の手を握ってくる。

「なんだ？」

「これで、何回目かな？ こうして、さと君と緑夏祭りに来るのは

「そうだな、高校からだし3回目になるかな。」

「・・・うん。 なんかね？ ここ毎年来てるのにね全然飽きない  
の」

「まあ、確かに年によって出店とかステージイベントとか違ったり  
するしな」

「そうじゃなくってね」 智瀬は苦笑いした。

「ん？」

「出店とか、イベントとかじゃないの。」

聡君あなたと一緒にだから、全然飽きることないの。

自分でも不思議なんだけど、毎年見慣れてる光景のはずなのに。

さと君が横に居るだけで、風景が毎年違って見えるんだよ」

智瀬は視線を夜空に移した。

「……………」俺もそれに釣られる様に視線を夜空へと移す。

星が綺麗だった。星には詳しくはないがきつと夏の大三角が見えているだろう。

ベガ、アルタイル、デネブ。だったかな？ 中学の頃習ったきりだから定かではない。

その星の一つ一つが、自分を主張してるかのように思えた。

『自分たちは、遠いけど確かに“ここ”に存在しているのだ』と主張しているかのように。

そして遠い、遠い。何億年もの旅をして星の光はこの地上に降り注いでいる。

そう考えると、なんだか物凄くロマンチックだ。

「星・・・綺麗だね」 智瀬は感嘆の息を漏らす。

「ああ、綺麗だな」

「ねえ、さと君？」

「ん・・・？」

「私たち、また来年も…一緒に来れるかな？ 緑夏祭りに。」

「当たり前だ。 来年も再来年も、ずっと。 何度でも来れるさ」

「・・・・・・本当？」

「不安、なのか？」

「少しね」 智瀬は俺の顔に視線を移すと真っ直ぐ見つめてきた。

「さと君、私のこと。好き？」

トクン……。

「ああ、好きだよ」

不安にさせてしまったのは、俺の責任だ。

「この前の続き、しよ？」 智瀬の声が妙に甘く、儂い感じがした。

「……ああ」 俺は智瀬の両肩を優しく掴み、体を密着させる。

「もう、離さないからな……」 そう、耳元で呟いて。

「うん……嬉しい……」

「智瀬……」 ゆっくりと智瀬の顔に自分の顔を近づけていく。

まもなく、花火大会が始まります。 ご観覧の方は

公園奥の展望フロアまでお越しくだ

さい。

アナウンスが公園中に鳴り響いた。 もちろん、俺たちの耳元にも。

「・・・・・・・・・・」 アナウンスに気を削そがれ俺たちは静かに体を離れた。

「花火・・・観に行こうか」 智瀬はバツが悪そうに俯き腕を絡めてきた。

「そう・・・だな」 なんだか、気まずい。

俺たちは、特別な会話もないままにその場を後にするのだった。

## 7章Cパート

カランカラン 音を立てながら俺と智瀬は広場までの石段を登って  
いく。

「……………」 その間、俺たちは無言だった。

でも、繋いでいる手の温もりはずっと感じられた。

だから、なんとなくそれだけで安心できた。

……………。

……………。



「わー、人がいっぱいだね」 智瀬は目を丸くした。

無理もない。 今年は例年と比べても特別に観客の数が多い気がする。

展望広場自体は割と広い、だから観客で“満員電車”状態になることはなかった。

でも、今年はなりかけている。 ギリギリで足の踏み場があるような状態。

人、人、人。 とても暑苦しい。

「そうだな、結構人居るけど花火ちゃんと見えるのかね？」

「大丈夫だよ！ だって花火はお空に上がるんだもん！」

子供のように、智瀬は夜空に向けて手を上げた。

「はは、そうだな」

本当にガキかよ、全く。

でも、そんな智瀬を見るのも悪い気はしない。

花火を打ち上げる機械の点検の為、予定を変更しまして

花火打ち上げは30分延長となりますのでご了承

下さい

場内に、再びアナウンスが流れた。

「なんだ、まだ待たなきゃいけないのか」

俺たちはお互いの顔を見て、肩をすくめた。

「痛っ」 後ろの方で、女の子の声があった。

「夏美？」 眩き、振り返る。

石段の下方。そこには、先程入り口で見かけた兄妹の姿があった。

「うえ……」 妹はどつやら石段に躓いて転んでしまったらしい。

今にも泣きそうな顔で妹は上をスタスタと歩いていく兄を見つめていた。

「ママ、どこに行っちゃったんだろう……」 兄はそんな風にキョロキョロしていつ

妹のそんな様子に気づいていない。

「……」

妹は兄に気づいてもらえない事を悟るとポロポロと大粒の涙を零し始めた。

そして、口を微かに動かす。

『タスケテ・・・オイテカナイデ・・・』 俺には、そう言っているように思えた。

痛くて、辛くて声にならないんだろう。 口は動いていても、それに声が伴っていない。

置いていかないで・・・。

声にさえなっていない女の子の悲痛な叫びが、俺の脳裏に届く。

“それ”は俺に言っているわけではないはずなのに。

何故か、夏美とリンクした。

言葉とかではなく、表情や仕草。その瞳。

そう遠くない昔…いや過去にもあんな顔を…。俺は見たんじゃないか？

記憶が曖昧で全然ハッキリしない。

それはいつなのか、どこでなのか、何故それが生じたのか。

「さと君？ どうしたの？」 その声にふと視線を智瀬に戻す。

智瀬は心配そうな表情をしながら俺を見つめていた。

「え、いや。 ちよつとな。」

「……夏美ちゃんの「ト」？」 少しの間を空けて、呟いた。

「いや、違つよ」

でも、その智瀬の質問は当たらずも遠からずだった。

「？」

「ごめん、智瀬。 ちよつと待ってて」

「ちよつ、さと君?!」 俺は智瀬の手を解いて階段を下る。

「あれえ、ママどこに行ったのかな？」

相変わらず、男の子はキョロキョロしている。

「おい、ちょっといいか？」俺はそんな男の子に話しかけた。

「お兄さん、誰？」男の子はポカンとした様子で俺を見つめていた。

「俺が誰なんてのはどうでもいいんだ。

それより君、なにか大切なものを忘れてるんじゃないのか？」

「大切なもの？」

「…自分の手を見てみる」

そう、さっき入り口に居たときは握っていたはずのその掌。



いつの間に、離してしまったんだ？

『もう離すんじゃないぞ』そう言って差し出した手だったはずだろ  
う？

「手？・・・あ」

少しの間不思議そうに自分の掌を見つめていたが

ふと気がついたように後ろを振り返る。

「ふえ・・・・・・・・お兄ちゃん・・・」 倒れこんだ女の子が泣い  
ていた。

「梨恵りえ！」 男の子はその女の子に向かって走り出す。

「じゅめん、梨恵。 ママ捜してて気づかなかったんだ」

男の子は女の子に手を差し出すと、女の子はそっぽを向いた。

「私、忘れられちゃうような子なんだ？」

違う・・・忘れたことなんかない・・・。

「そんなんじゃないって、とにかく泣き止んでよ」

男の子は女の子の涙を拭ってあげる。

そうやって、優しくしてきたのは俺のほうだろう・・・？

中途半端に優しくして、結局中途半端に言葉を交わして。

「お兄ちゃんのバカ！　足痛いもん！　歩きたくないもん！」

「仕方ないなあ・・・」　んしょっと男の子は女の子を背負う。

「お兄ちゃん・・・？」

「ごめん、僕が悪かった。　だからもう泣くな。」

「・・・うん」　女の子は兄の背中に寄り添うように頬を寄せた。

守ってきたのは・・・俺だろうか？

これからもずっと一緒だと約束したのも・・・俺だろ？

妹を背負った兄は、俺の横をすれ違う瞬間俺に笑顔で言うのだった。

「お兄さん、ありがとう。お兄さんが居なければ僕の大切なもの……。」

見えなくなっちゃうところだった。」と。

「……梨恵ちゃんの事、離すんじゃないぞ。梨恵ちゃんがいつか大切な人

を見つげるまで、君がその子を守るんだ」

俺は、そう言って「うん、お兄さんバイバイ」と言う二人を見送った。

何を言ってるんだか、全く青春中か？俺は。

「なるほど、あの兄妹を放っておけなかったのね」

上から智瀬がカランカラン音を立てながら降りてきた。

「ああ、ごめんな。 智瀬」

「ううん、さと君優しいのは分かってるし。 それに私だったら同じ事してたし。」

「優しさ……か」

今は本当に優しさだったのかな。

ただ、“自分”を見てるようで嫌だったただけなんじゃないだろうか。周りに気をとられて、後ろで俺を見つめ求める存在に気づかず手を差し出せない。

俺みたいで・・・嫌だったただけだ。　これは優しさなんだろうか。

『つぶぶ・・・お兄ちゃんってやっぱり優しいね、素敵』

階段の下から、そんな声が上がってくる。

「え、その声は・・・夏美か?！」

『ピンポン、流石お兄ちゃん声だけで分かっちゃうなんて。』

あたしたちって、やっぱり通じ合ってるのかなあ??　クスクス  
『っ』

そんな笑い声と共に、姿を見せたのは紅い浴衣を着た夏美だった。

「え、夏美……ちゃん……」 驚いたような声を出す智瀬。

「お前、どうしてここに……？」

驚いている俺たちに、夏美は虚ろな瞳を向けて言うのだった。

“もちろん、お兄ちゃんと祭りを楽しむ為だよ” と。





## 7章Dパート

暗闇の中に、少女は佇んでいた。

そして、俺に向かって笑いかけてくる。

『一緒にお祭り行こう』と。

「夏美……どっつて……」

「いめんね、っっそり後をつけてきちゃった。」

でもお兄ちゃんも水臭いなあ、お祭り行くならあたしも誘ってくればいいのか」

「あ……あ……」 智瀬の顔がどんどん青ざめていくのが分かった。

「智瀬……？ 大丈夫か……？」

「……………どうしてここに居んのよ」 俺の質問には応えずに智瀬は夏美に

ツカツカと歩み寄ると睨みつけた。

「何、あんた？ あたしがここに来てるのに文句あるわけ？」  
負けじと、夏美も睨みを利かせる。

「答えて！ どうしてここに居るのよ?!」 智瀬は叫ぶ。

「どうして？ そんなの決まってるじゃない」

夏美は不敵に笑うと俺の腕にか細い腕を絡めてきた。

「なっ・・・おい」

「お兄ちゃんは黙ってて。 安心して、あたしがこの女を追い払ってあげるから」

上目遣い気味で俺に微笑む。

「ちょっと！ 何腕組んでるのよ?!」

智瀬は必死に俺と夏美を引き剥がそうとする。

しかし、腕に込められている力は思いの他強くなかなか外れない。

「無駄よ。あたしとお兄ちゃんは“愛し合って”いるんだもん。

そう簡単に外れたり、離れたりなんかしないよ」

「?!」

その夏美の言葉を聞いた瞬間、智瀬は俯き眩いた。

「愛し合ってる？ ふざけないでよ」

その声は、なんだか怒っていて。それでいて泣きそうな感じだった。

「は？」

「ふざけないでって言うてるのよ。 そんな夏美ちゃんの勝手な勘違いで」

私とさと君の仲に割って入るなんて・・・いくら妹でも酷いよ」

消え入りそうな声。 その声はスウッと夜の闇に消えていく。

「・・・」

「ねえ、さと君？ 私、やっぱりさと君の傍に居ちゃイケナイのかな？」

俯いたまま、震えた声で問う。

「え……………？」

「私…………さと君の傍に居ることです、さと君を…………夏美ちゃんを…………傷つけてる？」

浴衣の裾を、キュッと握る。

「そんなこと……………」

「やっと気づいたの?」

俺の言葉を遮る様に、夏美は言う。

「あなたが居るから、お兄ちゃんが苦しい思いをするの。」

あなたが居るから、あたしはこんなになるの。

そんな当たり前のこと、今まで気づかなかったわけ?」

「お、おい! 夏美!」

「……………」  
智瀬は身体を震わせ、何かに必死に堪えている  
ようだった。

そして俺の言葉を無視して、夏美は続ける。

「あんなんか、居なくなっちゃえばいいんだ。」

「あなたが居なきゃ、あたしとお兄ちゃんは今頃“結ばれて”いたはずなのに！」

チガウ・・・ヤメテクレ・・・。

「っ・・・」

ブルブルと震えが大きくなる。

「あんなんか・・・あんなんか・・・」



ギユツ。  
裾を掴む手に、さらに力が入る。

ヤメテクレ・・・オレハ、コンナコト・・・。

あんななんか、死んじゃえ!!!!!!!!!!!!!!

夏美は、智瀬を睨みつけ叫んだ。

声が、どこまでもどこまでも。 木霊していく。

月明かりの中で、その木霊に身体をビクつかせて智瀬はその声に  
える。

「分かった・・・私は・・・」 さっきまでの強気など、もう何処にも存在していなかった。

「智・・・瀬？」

顔を上げた智瀬。

その顔は涙でクシャクシャになっていた。

胸が・・・痛い。 心臓が嫌なほどドクドクいつている。

なんで、そんな顔するんだよ。 なんでそんな顔しなきゃいけないんだよ？

なんで俺は何も言えないんだ・・・なんで言葉が出てこないんだ・・・！！！！

心の中で、自分自身を殴りつけてやった。

でも、そんなのじゃ問題が解決するはずもない。

「私は・・・消えるね・・・さと君・・・ごめんね」

震えた声で、そう言う。そして笑う。

静かに踵を返すように階段を下っていく。

ごめんね？ どういう意味だよ？ 智瀬？

どこに行くんだよ？ 消えるってどういう意味なんだよ？

追いかけたかった。 追いかけて今の言葉の意味を一語一句逃さずに

問い詰めたかった。

でも、体が金縛りに遭ったように動かない。

俺の足に、根っこでも生えてしまったんじゃないかと錯覚するほどに。

カラン・・・カラン・・・。

“音”が、次第に遠くなっていく。 智瀬が、遠ざかっていく。

俺は……このままでいいのか??

流れに身を任せたままで、なすがままでいいのか??

でも……今この腕を解いたら夏美はどうなる?  
ほど

また一人になってしまっくんじゃないのか。

自問自答する俺を他所に、夏美は嬉しそうに俺に甘えた声で

「お兄ちゃん、あんな女もっ忘れて。

あたしと一緒に居よ? そっちの方が幸せだと思っよ?」と本当に嬉しそうに。

「……………」俺はそれには答えなかった。

そして俺は空を見上げる。一人佇むように。



## 7章Eパート

見上げた夜空は、相変わらず雲一つ無く。

キラキラと星が瞬いている。

「・・・・・・・・」

この星を見つめ、智瀬はなんて言っていた？

280

『私たち、また来年も…一緒に来れるかな？ 緑夏祭りに。』

その問いに答えたときの俺の言葉は、嘘だったのか？

もう離さないと…言っただろ。

このまま智瀬を失っていいのか…？

彼氏である俺が智瀬にあんな表情させたままでいいのかわよ？

「ねえ、お兄ちゃん。　またあの女のことを考えてるの？」

ふと気がつくと、夏美は腕を解き俺の目の前に立っていた。

「あの女って…お前、そんな言い方」

「だって、あたしからお兄ちゃんを“奪った”んだよ？」

「奪った…？　違う…。」

俯き、目を閉じる。

「なあ、夏美。　今日を閉じて一番最初に思い浮かぶのは誰の顔だ？」

「え、そんなのお兄ちゃんに決まってるじゃん」

「……………」俺は、俺が真っ先に思い浮かんだのは。

そうだな、もう答えは決まっているじゃないか。

どっちかを傷つけないで、なんて甘い考え。元々無理だったんだ。

「ごめん、俺は違うみたいだ」

目を開けて、夏美に真っ直ぐ向き合った。

「え？ 何言ってるの、お兄ちゃん？」明らかに動揺している。

言葉では分からないフリをしているが

多分、俺が言いたい事を悟ったからなんだろう。

「ごめん、俺が好きなのは智瀬だから」

俺はそう言つと夏美の横を通り過ぎ、階段を下っていく。

「待ってよ！ お兄ちゃん！ あたしはお兄ちゃんが好き、大好きなのお！！」

イカナイデ。 夏美はそう言った。

でも俺は。

「俺も夏美のことは好きだよ」 立ち止まる。 けど振り返らずに

答えた。

「だったら……!!！」

「でもそれは妹としてだ。 家族としてならお前をずっと好きでいるよ。」

「妹として……？ そんなの嫌だよ!!！」

お兄ちゃんは忘れているかもしれないけど、あたし達 !!！」

「もう決めたことだから！ 俺は…智瀬を守る。」

お前のことは…もう守れない…ごめん、夏美。」

夏美の言葉を一蹴するように言い放った。

「待って……待ってよ……」

声が震えだした、今にも泣き出しそうだ。

夏美は今、どんな表情をしているのだろうか？

声色から察するに、きっと苦痛に顔を歪めているに違いなかった。

それを分かっているにも、俺は夏美の頭をもつ撫でてやる事はできなかった。

「夏美、ごめん」

そのまま走り出す。もう振り向くわけにはいかない。

「待ってよ……！ お兄ちゃん……お兄ちゃん……聡さん……！」

夏美の声が、遠くなっていくにつれ

それに比例してその声が痛々しくなっていく。

その声に、気持ちにはもう応えられない。ごめん、本当にごめん・  
。。。

。。。。。

。。。。。

。。。

階段を下り終わると、俺はベンチにちょこんと座っている智瀬を  
見した。

「智瀬！ 良かった、まだ居たんだな」

そう言って智瀬の方に駆け寄る。 だが・・・。

「来ないで！」 あと数メートルという所で制されてしまった。

「え？」 予想外の展開に固まる。

「なんで来たの？」 俯き、囁くような声で呟く。

「なんでって、そりゃ・・・」

「夏美ちゃんは？ どうしたの？ 一緒じゃなかったの？」



悲しく、それでいて怒っているような様子。

「待ってくれよ、俺の話を聞いてくれ。」

俺は夏美にハッキリ言ってきたんだ、俺は智瀬の事が好きなんだって。

夏美のことは“妹”として好きなんだって。 血の繋がった家族としてって。」

「妹として……？ まさか、さと君夏美ちゃんとのこと」

そこまで言っつて口を紡ぐ。

「え？ 何、なにが言いかけなかった？」 夏美とのことってなんのことだ？

「そうだね……私との事も、忘れてるんだもんね……」

ポソリ、呟いた。

「お、おい。 さっきから何の話をして・・・」

「ごめん・・・私もう帰るね」 言って、立ち上がり浴衣についた砂を掃う。

「お、おい。 もう帰るのかよ？ もうすぐ花火が始まるんだぜ？」

ここまで来たのに、それにあんなに花火を楽しみにしてたじゃないか？

「ごめん、私具合悪いから。」

「それじゃあ、家まで送るよ」

「いいよ、一人で帰るから」

「何言ってるんだよ、俺は智瀬の彼氏なんだぜ。 遠慮するなって。」

近づき、智瀬の左手をそつと握った。

「!! やめてよ!!」 その手はすぐに振り払われてしまった。

「え………」 一瞬、何があったか分からなかった。

「………」 目の前には自分の左手を右手で抑えつけている  
智瀬。

「智瀬……？ どうしたんだよ？ 今までそんなこと………」

「ごめん、さと君。私、あなたを騙してた。」

「は………？」

「悪いとは思ってたんだけどさ。 実はあの時の告白・・・。」

クラスメイトの女の子に命令されて仕方なくしただけだったんだよね。

ほら、私ジャンケン弱いでしょ？ だから10連敗したら罰ゲームするっていう

変な約束がとりつけられちゃって、私弱いからまさかの10連敗しちゃって。」

「な、何を言ってるんだよ?。」

「それでね、罰ゲームってことで。 たまたまランダムで選ばれたのが貴方だったの。」

びっくりしちゃったよ、断るかと思ったら“オッケー”しちゃうんだもん。

まあ、その場では罰ゲームだなんて言い辛かったから言えなくて。

そのままズルズルと2年間もやってきちゃったけど。 どう?.

恋人ごっこは、楽しかった?。」

あはは、と智瀬は苦笑いした。

「ちょっと待てよ、訳分からねーよ……」 頭が混乱している。

つづことは、あれか？ 簡単にまとめると。

俺と智瀬の2年間は、ただの罰ゲームの延長線で。

そこに気持ちは無かったってことなのか？

「俺のこと、最初から好きじゃなかったってことかよ？」

否定してほしかった。でも智瀬から返ってきた答えは。

「そういうことになるね。」 肯定だった。

嘘だろ・・・？ そんな、だって・・・。

「そういう事だから、もう私に近づかないで。 じゃあね」

カランカラン、離れていく。 再び離れていく。

俺は事実を呑み込めず、ただ啞然としてその後姿を見つめていた。

トロー・・・・・・・・・・・・ドーン！！！！

ビュー……………ドーン!!

遅れていた花火は、その瞬間に上がった。

階段の上からは観客の歓喜の声が上がっているのがここまで聞こえた。

けれど、そんな声も今はウザったいだけだった。

よく分からない、何がどうだったのか。

俺と智瀬の関係は……………今までの2年間は、嘘だったっていつの  
よ?

そんなの……………そんなの……………ありがよ……………。

「……………くっ」

ボンヤリ、目の前が滲んだ。　ボロボロと堰せきを切ったように溢れてくる。

「んだよ……………チキシヨウ……………」　情けなくなって、苦し  
くなって。

智瀬が座っていたベンチに腰掛けると静かに泣いた。

もう智瀬の温もりは、どこにも残っていなかった。

残っていたのは、心のモヤモヤと孤独感だけだった。

花火が打ち上がっていた。



大きな音を立てながら、でもその光はほんの一瞬しか輝かない。

なんだか、俺と智瀬の関係みたいだな。　　いろんなことがあったけど

終わるのは・・・本当に一瞬の出来事だ。

## 8章Aパート

\* \* \* \* \*

「ただいま・・・」 重苦しい気分で家のドアを開ける。

家の中は暗く、返事はない。

お母さん、やっぱりまだ帰ってないんだ・・・。

携帯を開く。

暗闇を携帯の液晶画面が照らす、少し目が眩むほどに。

「うん」 メール画面を開いて、今朝のお母さんからのメール

を見る。

“仕事の都合でまたしばらくの間、家を空けます。

今部屋の中は仕事に使う書類等で散らかっているので勝手に入らないように。”

いつものお母さんらしからぬ、そんな丁寧な言葉で

メールには、その一言だけが書いてあった。

「お母さんは、いつつもタイミング悪いなあ」 呟き、そのメールに返信する。

“いつ頃帰って来れそう？ なんか寂しいから早く帰ってきてね”

.....送信つと。

パタッ。 携帯を閉じる。

「……………」 明かりを点けずに危なっかしい足取りで階段を上る。

ガチャ、ボタン。

自分の部屋に入ると、急になんだか悲しくなってきた。 どうして、こんなことになってしまったのか。

「…………あれ」

私、泣いてる？ 今泣いてるの？

ハラハラと、涙は頬を伝っていた。

部屋に射す、月明かりが照らす。 それはベッド横。

私と『彼』を写した写真。

笑ってる・・・私、こんなに笑えてたの？ あの人も笑ってる。

ぴったりと、くっついている。

『彼』が瞳に映る度に、胸がキユウと何かに掴まれるみたいに苦しくなる。

さと君・・・・・・・・私は、私はね　。

写真をギュッと胸に抱き、蹲り嗚咽を漏らす。

・・・・・・・・。。

・・・・・・・・。。

・  
・  
・  
。

窓を虚ろ気に見上げた。

月明かりが差し込む窓の向こう、貴方は今、誰を想っていますか？  
誰のことを、思い出していますか？ 私のことを、きちんと“憶えて”いますか？

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

【8月10日】

「……………んあ」 寝ぼけた頭でゆっくりと起き上がった。

でもすぐに昨日の出来事が脳裏にフラッシュバックしてくる。

「……………くそっ」 お陰で簡単に頭が起きてしまった。

昨日、結局あの後どうやって帰ったのかは覚えていない。

ただ、きちんと覚えているのは。

心に残る、鈍器で殴られたかのようなズシリとした痛み。

そして、隣に居たはずの“温度”の虚無。 存在の、虚無。

何よりも、心にポツカリ穴が開いてしまっているかのような感覚。

空虚で、とても切ない。 言葉では言い表せない。

強いて言葉にするなら、『ダルい』だろうか？

「……………」  
頭を掻く。

昨日のことが、実は夢でしたみたいなオチだったら良かったのだが。

自分が着物姿だというのが、それを否定していた。

その時だった。

コンコンと、部屋のドアがノックされたのだ。



## 8章 Bパート

着替えずに寝ちゃったのか、と頭をポリポリと掻く。

コンコン、ドアがノックされた。

そして俺の返事を待たずに扉は開かれた。

「お兄ちゃん、おはよう」 夏美だった。

「夏美……」 なんで俺の部屋に……昨日あんなことしたのに。

なんで、そんなに普通に入ってこれるんだよ？

「お兄ちゃん、今日あたしとデートしない？」

頬を赤らめ、照れ気味に言う妹。

「でーと？ いや、ちょっと待てよ」

おかしい、何かがおかしいんじゃないのか？

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「だってお前……」

昨日の今日だぞ？ あんなことがあったのに、お前は。

「あたしなら、平気だよ。」 屈託ない笑顔で続けた。

「気にしてないから。それに、お兄ちゃんを捨てるような“女”なんて。」

やっぱりお兄ちゃんには相応しくないよ！

ましてや、罰ゲームで付き合つとか最低じゃん！

そしてムスツとしたように、言うのだった。

「……見てたのか」 昨日のあの出来事を。

「ごめんね、あの後慌てて後を追いかけたら二人がなんだか険悪っぽいムードに

なっていたから、つい聞いちゃった。」

「いや、いい……。恥ずかしい所見せちゃったな……」

兄として、いや男として格好悪い。

「大丈夫だよ、そんなダメダメなお兄ちゃんでも、あたしは好き。」

ギシッ。俺のベッドに腰掛ける。

ふわっと、夏美の良い香りがした。

お風呂上りの、石鹸と『女の子の香り』が混じっている、いい匂いだ。

一瞬、その匂いにクラっとしそうになった。

「ねえ、お兄ちゃん？ あたしね、そろそろ答えがほしいんだけど。」

「

「答え？」

「そう、答え。あたしと、あの女。結局の所どっちが好きなか。」

「.....」

決めようにも、俺は昨日智瀬にフラれてるんだぜ？

そんなの選べようがないじゃないか。

「あたし、分かる。お兄ちゃんまだ『あの女』の事考えてるでしょ？」

「そんなこと・・・」 違うといえば嘘になる。

偽りの関係だったとはいえ、俺にとっては2年間の間

彼氏・彼女の関係だったんだから。2年間の間に少しずつ“好き”が積み重なって

いつの間にか巨大なものになっていたんだ。

「お兄ちゃん、8年前の事。憶えてる？」唐突に質問は投げられた。

その質問、同じ事を少し前に智瀬から訊かれた気がする。

「・・・智瀬にも同じ事を訊かれた。でもぼんやりとしてて、よく憶えてないんだ。」

8年前なのかは定かではない、でもいつかの昔

どこかで見たと、感じた風景や感情は断片的になら記憶に残っていた。

「・・・なるほどね。」夏美は何かに納得したように頷いていた。

「お前、ひょっとして知ってるのか？ 8年前の事」

「もちろん。ていうか、お兄ちゃんが一番忘れてはいけないことなんだよ?」

急に真剣な眼差しを向けてくる。

「思い出して、じゃないと答えなんて絶対に出せないから」

「え……それってどういっ……」

「自分で思い出さなきゃ意味ないの！ だからお願い、あたしの為に思い出して。」

「……………」

「もう仕方ないなあ…………。ヒントは、モリコーの迷子。」

迷子？ モリコー？ あれ、なんだか懐かしい感じがする。

……………。

……………。

……………。

あ．．．．。

断片的だった記憶が、パズルのピースみたいだったそれが。

カチカチと音を立てながら組み上がっていく。

そうだ、そうだった．．．。

何故、忘れてしまっていたんだろう。　こんな大切なことを　。

## 8章Cパート【?】

\* \* \* \* \*

8年前、俺がまだ小学生だった時。

当時の俺は母さんと二人で田辺町、あの教会がある町に住んでいた。

本当の親父がどこに行ったかなんて分からない。

物心ついた時には、すでに俺の傍らには母さんが一人だけだった。

それは俺がその町に引っ越すより、かなり前のこと。

8月、夏休み。

俺は母さんと二人で親戚の家に遊びに行った。



それは恒例で、毎年行っているものなんだが。

その家は、今俺が住んでいる凧名町にあつて。

電車で少しの距離だったが、その途中がとても退屈だったのを

幼心に覚えている。

しかも割と山の中なので、することがあまりなかった。

.....

.....

「あら、聴くん。また大きくなった？」 玄関で出迎えてくれる  
叔母さんの

第一声は必ずこれ。

「.....知らないよ、そんなこと」

毎年同じことを言われるので、少しウンザリしていた。

「最近、この辺にも泥棒が出るらしいのよ」

「え？ そうなの？」

「そうなの。それもしかも噂では小さな女の子が犯人らしいの。」

「ええ？ 誰か見たの？」

「この前、八百屋さんの店頭に置いてあった野菜を服の中に入れて持って行った女の子を店主が見たっていうのよ。」

慌てて追いかけたけど、すばしっこくて逃げられてしまったらしいのよ。」

「ふうん、世の中分らないものね。戦時中でもあるまいし。」

「小さい子が泥棒を働くななんてね。」

部屋の隅っこでゲームをピッピピッピやっていた

俺にとってはどうでもいいことだった。

でも、近くにいるのでそんな母さんと叔母さんの雑談が嫌でも耳に入ってくる。

「どんな子なの？」

「店主が言うには、古びた白いワンピースを着た・・・そうね。」

丁度聡くんぐらいの歳の女の子だったことらしいのよ。

小学生くらいじゃないかって。」

俺と同じぐらいの女の子が？ でもどうしてそんなことを。

.....  
.....

その後も、二人の雑談は続いた。

ゲームにも飽きて、俺は部屋を抜け出した。

・・・二人は雑談に夢中になっていて俺には気づいていない様子。

こんなんが毎年続いている。しかも途中で親戚の叔父さんとかも集まってかなり賑やかになる。

3泊4日の、俺にとってはとてつもなく暑くて、退屈な小旅行。

「ちえつ。遊びに行くっていうか、話に来てるだけじゃないか」

心の中で毒を吐きつつ、玄関で靴を履くと外へと飛び出した。

少し歩いて町のほうに降りていく。

行く宛ても無く、商店街をただふらふらと歩き続けた。

この町は毎年来ているんだし、もう自分の町みたいに大体の地図は頭の中に入っていた。

「どうしようかな・・・」 辺りをキョロキョロ見渡す。

辺りは食べ物屋から服屋。 雑貨店からゲームセンターまで。

いろいろな店があり、目が回りそうになるくらいだ。

「あれ？」

ふと、俺と同じくらいの女の子が長いフランスパンみたいなものを  
両腕に

抱えながら奥のほうに走っていくのが遠くに見えた。

服装は少し古ぼけた白いワンピース。

「あれ？ あの子ひょっとして、母さんたちが言ってた……」

なんとなく、その時は好奇心で追いかけてみようと思った。

それに、もしあの話の女の子ならあのパンは……。

……。

・・・。

「・・・ふう」 女の子は商店街の一番奥、今は使われていない寂れたシャッターに

ガシャンと音を立てながら寄りかかる。

どうやら、「ここが終着点らしい。

「そんなところで何してるの？」 俺は女の子に話しかけた。

## 8章Cパート【?】

「?!」 女の子は驚いたように体をビクッとさせた。

そして恐る恐るこちらに顔を向ける。

「あ、あなた・・・誰？」

「俺？ 俺は鷺原 聡。君の名前は？」

「・・・・・・・・」 俺の名乗り損だった。 女の子は答えず、俺を  
怯えきつた

瞳で見つめる。

「私を・・・捕まえにきたの？」

「捕まえる？ なんのことだよ？」

「とぼけないでっ」 少女の表情が重く歪んでいく。

「今私が泥棒したの、見てたんでしょ?! だから追ってきたんでしょ?!」

「ちよ、落ち着けつて」 俺は女の子の両肩を掴む。

そして、その体のか細さにびっくりした。

「君・・・こんなに痩せて・・・」

触っただけで分かった。 遠目には分からない、その華奢な体。

「・・・」 肩を掴まれ、驚いたようだったが女の子は力なく俯いた。

「どうせ、あなたも笑いに来たんでしょう？」 蚊の鳴くような声を搾り出す。

「え？」

「皆、そつだもん。 皆私やお父さん、お母さんを笑つんだもん！

好きなことをして何が悪いの?! お家が貧乏で何が悪いの?!

笑っただけで助けてくれないっ 生きていくために泥棒して何が悪いの?!...!」



一頻り叫ぶと、悲しくなったのか女の子の両親には涙が伝っていた。

事情を聞くと、両親は昔から絵が得意で町に繰り出しては町行くお客さんの“似顔絵”を描いて生計を立てていたらしい。

しかし、客も少なくその収入は安定せず家族三人で暮らすのもギリギリの状態。

それでも、女の子の両親は似顔絵描きを辞めなかった。

両親に言われたらしい。似顔絵を描いた時の、お客さんの喜ぶ顔が好きなんだそうだ。

自分の才能で、誰かを喜ばせる。これ程嬉しい事はないんだそうだ。

また彼女もそんな両親が大好きなんだと、彼女は俺に何かを懇願するように必死に言っていた。

貧乏なりに、自分たちの好きなように暮らしていた家族。

でもその家族を“貧乏家族”だとか“今時似顔絵なんて何を考えているのか”だとか。

非難する声もまた、少なくなかった。

だから、空腹を満たすため。そして自分の大好きな両親を否定する人達への復讐。

頻繁に盗みを働いては、ここで一人で泣いているんだそうだ。

なんで泣いてるのは、彼女自身分らない。

「そうか・・・そんな事情があったのか」

最初に見かけたときは、何故泥棒なんてするのかと彼女の行動は理解し難かった。

でも事情を聞いてしまったら、なんとなく気持ち分かる気がする。

もしも、自分がこの女の子と同じ立場だったら・・・。

きっと、同じことをしてしまう。

「私、友達もないし味方は・・・私のこと好きでいてくれるのは・・・」

お父さんとお母さんだけ。と女の子は顔を上げて悲しく笑った。

「・・・・・・・・」　なんでそんな顔するんだよ。　なんでそんな事、笑いながら。

「なら、俺が友達になってやるよ」

その悲しげな表情を見てたら、自然とそんな言葉が口から飛び出していた。

「え？　え？　え???」

三度、女の子は首を傾げた。そして俺と自分を交互に指差して

「お友達・・・?」ともう一回首を傾げた。

「・・・・・・・・ぶっ。　あっはははは」　そんな様子が可笑しくて思わず笑ってしまっ。

「ああつ　なんで笑うのお?!」　女の子は頬を真っ赤にして俺を睨み付ける。

「ごめんごめん、つい」

なんとなく、可愛いと思ったから。　なんて口が裂けても言えない。

「でも、私。　貧乏だよ?」

「そんなの俺には関係ない!　ていうか、うちもお金持ってる方じゃないし」

「私、泥棒だよ?」

「これから辞めれば問題ない!」

「私・・・私・・・」

女の子は少しの間言葉を探しているみだいだったが、出てこなかったのだろう

諦めたかのように俺を見つめた。

「本当に、友達になってくれる？」

「ああ、俺でよければな」

「嬉しい・・・」 女の子は俺に抱きついて“わんわん”泣き出した。

多分、今まで一人で抱えてきたものがスウッと楽になったからなんだろう。

「ちょ・・・離れるよっ」

「えーんっ・・・えーんっ・・・」

照れ隠し故のそんな言葉すらも、今の彼女には聞こえていないようだった。

くチャンチャラチャラリン      その時、非常用に渡されていた俺の携帯がポケットで

鳴っているのに気がついた。

「あつと、ごめん」 女の子を一回離して電話に出る。

「もしもし」

『もしもし？ じゃないわよ！ 聡今何処にいるのよ?!』

受話器の向こうから聞こえてきたのは母さんの怒鳴り声だった。

「えっと・・・町まで降りて・・・」

『またあんた勝手に町まで降りだのね?! 駄目じゃないっ 勝手に出掛けたりしたら。』

何かあったらどうするのよお!』

「いや、でも」

『でもじゃない! 早く帰ってきなさい!』 ブツツと乱暴に通話が遮断された。

「帰っちゃうの・・・?」 母さんとの会話を聞いていたのか女の子は不安げに

俺の腕を掴んできた。 真夏で気温が上昇している所為かその手はどこか汗ばんでいた。

「うん、いめん。 母さんを怒らせると面倒なんだよ」 いや、本当に。

「そっか……。ねえ、明日とかまたここに来てくれる？」

「え？ 明日？ 分からないなあ……。」

「友達……。」 指に人差し指を啜えて、寂しそうな声を出す。

「ああ、もう分かった！ 友達だもん！ なんとか来るよ！」

「わーい」 女の子は表情をコロコロと変えてニコニコしている。

「まったく……。じゃあ明日な」 女の子の頭をそっと撫でて立ち去ろうとした。

「待って」 でも、すぐに呼び止められてしまう。

「なんだよ、心配しなくても明日ちゃんと来るって」

「うっん、違うの。」

女の子は、モジモジしながら「私の名前、言っの忘れたから」と頬を染めた。

「ああ、そういえば。名前、なんていうの？」

改めて、君の名を問う。

君は笑顔で答えた。

「智瀬。私の名前は、柳智瀬。」



## 8章Cパート【?】

「暑い……」 眩きながらジャリジャリと砂を踏みながら歩く。

今日は昨日に比べ暑かった。

それは商店街の奥。

今は使われていないところ。

母さんから聞いたことがある。昔とある事件があった

その事件で死亡者が出たそうだ。

警察は犯人を取り逃がし、今も捕まっていないとのことだった。

所謂、イワク付物件のようなものだった。

その事件で殺された男の魂が夜な夜な徘徊するとかの噂が立って。

いつの間にか、“その奥のほう”だけには人が寄り付かなくなりそこに軒を連ねてた店の人も『商売にならない』と判断し重く、店のシャッターを閉めてしまった。

それから数年、ここはすっかり閑散としたシャッター街となってしまったわけだ。

「あちい・・・」

天井のアーケードはそのままなので、日差しは射してこない。

そんな本当に“人類が滅亡した後”の商店街のようだ。

暗く、でも外の風通しが悪いため空気が籠り逆に暑い。

なんでこんな所に、昨日の少女・・・智瀬ちゃんは平気で居られるんだろうか。

いや、或いはここに居なきゃいけない理由でもあるのか・・・。

ジャリ……。。

シャッター街の一番奥の店。昨日と同じシャッターに少女は寄りかかっていた。

手には何故かアイスの棒を持っていて、それをペロペロとなめている。

「智瀬ちゃん、まさかそれ盗んできたの？」

全く、変な挨拶だと思う。来て早々“盗んできた”とか。

「違うよお、これはちゃんと買ってきたの！」

女の子はそう言ってワンピースの胸元からレシートを出してみせた。

チラリ、成長過程で少し膨らみ始めている胸元が露になる。

「わっ……どこから出してんだよ?!」

「どっかって……あ……」

取り出した事で、自分の胸元が少し開けていた事に少女は気づいてとっさに両手で隠す。

「聡くん……えっち」 女の子は恥ずかしそうに俯いた。

「ちょ……なんでそうなるんだよ」

「いくら友達でも……そういうのって視姦っていうんだよ?」

「しかんって……」

その言葉、どこで覚えたんだ……お嬢さん……。

……。

……。

「んで、いつも君はここで何してるの？」

散々俺を変体呼ばわりした智瀬は

飽きたのが再び少し溶けかかったアイスを舐め始めた。

「何もしてないよ」

舐めながら、女の子は答えた。視線は完璧アイスにいつている。

「学校は？」

「行ってるよ。でも今夏休み中だから、家に居たくないしここに  
来てるの」

「家が嫌いなのか？でも、父さんと母さんのことは好きなんだろう？」

「.....」

その言葉で、何故か少女の動きが止まった。



## 8章Cパート【?】

少女はアイスを舐めるのを辞めた。

そして天を仰ぐ。

「あれ・・・どうかした？」

「お父さんもお母さんも、結構仕事で家に居ないから」

「へえ。 似顔絵描きってそんなに忙しいものなの？」

「さあ、でも好きなことだから・・・夢中になって私のことなんか忘れちゃってるのかも」

悲しく笑い、一瞬俺を見たかと思うとすぐに視線を上に戻す。

「そんなことは、ないと思うけど」

「どっしりっっっ」

「いやだって、本当に忘れちゃってるならきつと智瀬ちゃんは今頃・・・」

言いそうになって八つとした。

俺は今なんて言おうとした？ それは今の“この子”に言ってもいい言葉なのか？

「今頃？」 目を丸くして、少女は俺を見ていた。

「ほ、ほら。今頃家に入れてもらえないとか、そんなことが起きてる筈だろ？」

違う、俺が言おうとしたのはそんなことじゃない。もっと酷い・・・。

「うん・・・そうかなあ。確かに家にはいつでも入れてもらえるけど・・・」

「そうだよ。きつと仕事でも智瀬ちゃんの事考えてるはずだよ。」

忙しいだけ。だから、そんな悲しいこと言っなよっ」 少女の頭を撫でてやる。



くふふ、少女はくすぐったそうに笑った。

「……っ」 不覚にも、可愛いと思った。

「でも、やっぱりお父さんとお母さんと一緒に居たい……」  
だがすぐに、少女の表情は曇ってしまった。

「……」

俺はその時思ったんだ。 この子に、こんな顔は似合わない。

さっきみたいなの、何かに甘えたような笑顔。 そう、笑顔の方が似合うんだ。

「そつだ、智瀬ちゃん明日暇かな？」

「え、うん。 何かあるの？」

「なら、一緒に遊びに行かない？」

「……」 突然の提案に、面を食らったようだ。

キョトンとした様子で問い返してくる。

「一緒について、どこへ？」

「それは明日のお楽しみっ。実は俺も一回行ってみたい所があったんだよ。

でも、そこは普通友達と行くような所なんだけど俺“こっち”に友達って居ないから」

今思えば、その“こっち”という意味さえ彼女が理解していれば。

きちんと俺が説明していれば。あんな悲しい顔をさせなくて済んだのかもしれない。

「私で……いいの？」 自分でいいのか。昨日と同じような質問だ。

「ばあか、いいに決まってるじゃん。俺たち、友達だろ？」

「・・・ダメ」

「え？」 彼女のことだ、戸惑いながらも快諾すると思っていた。

でも、少女からの答えは『NO』だった。

「なんでダメなのさ？」

「だって、私と歩いたら聡くんまで泥棒みたく思われちゃうよ」

その瞳は、全てを諦めてしまっていた。

だから、俺は言った。「諦めるな」と。

「え？」

「何やる前から諦めてるのさ、そんなのおかしいよ。決め付け、カッコ悪い」

そう言って、少女の顔にビシッと指を指す。

「・・・・・・・・」

「それに、そんな風に思われても俺は平気。それなら“俺が泥棒だ”って言ってくれればいい。」

そうすれば、少しは智瀬ちゃんに何かを言ってくる人も減ると思うし。」

「聡・・・くん」少女は頬を上気させて「優しすぎる」と泣いた。

その涙は、嬉し涙だったのか。それとも突拍子もない提案に反応に困ったの涙だったのか。

泣いてる彼女を、俺はそつと胸に抱き寄せた。

“泣いてる女の子は優しく頭を撫でて、抱きしめてやれ” 小さい頃から

誰かに頻繁に言われていたことだった。

照れくさい気持ちを堪えて、俺は少女を抱きしめていた。

「優しすぎるよお・・・でも私、そんな聡くん・・・が、・・・き・・・かも・・・」

少女は胸の中で、小さく、小さく呟いた。

その言葉は小さすぎて、俺には聞き取れなかったけど。

なんだか、その口から漏れる吐息や微熱を帯びた身体が暖かかった。



.....

.....

そして、次の日。

「ほら、智瀬ちゃん！ 急いで急いで！」

「ちょっと、急ぎすぎだよお」

俺はワンピース少女の手を引き、大きな公園、モリコーに来ていた。

「到着！」 少女の手を離す。

じんわりと汗を掻いていたためか、スウッと手を通り過ぎる風がひんやりと

冷たく、気持ちよかった。

「…………ふえ〜、おっきな公園だねえ」 少女は公園の全体を眺めながら

目を丸くした。

「そう、森みたいな公園。だから皆モリコーって呼んでるらしいよ」

俺も来るのは初めてだけど。

「わあ〜……遊具がいっぱい」 パタパタと遊具に向かって駆けていく智瀬。

「そんなに、はしゃぐなよ」 苦笑い気味にその後を追った。

全く、さっきとは逆じゃないか。

……………。

……………。



ブランコや滑り台、シーソー等一通りの遊具を物凄いテンションでクリアしていく。よっぽど楽しいのだろう。

「聡くん、公園って楽しいんだね」 彼女は笑顔だった。

「そうだな、俺もこんな大きな公園初めてだから興奮するよ」

普通は、小さい頃とかに親に連れてきてもらったりしているはずなんだが。

やはり、彼女にはその経験は愚か公園で遊んだことすらない。

何故そうなのかは、訊くまでもないが。

「わーい、この公園どこまで続いているんだろ？」

そんな知的好奇心が働いた智瀬は急に公園の奥へと走り出していった。

「お、おい！ 待てよ、どこ行くんだよ？」

俺も慌ててその後を追いかける。

.....。

「はあはあ、やっと追いついた」

智瀬の足の速さは異常だった。これも日頃から泥棒を繰り返して逃走を繰り返してた賜物なのかもしれない。

・・・などと感心している場合ではない。

智瀬は公園の奥の散歩道から更に奥、完璧に木や緑が生い茂る森みたいな場所。

そこに智瀬は立っていた。

もうすっかり夕方になっていた。

それまでの暑さは和らぎ、木々の隙間から漏れる光は綺麗な茜色になっていた。

「こんなところまで来て、迷子になったらどうする……」

「待つて、あそこに誰か居る」

智瀬はここから少し先の大きな樹を指差して言った。

「……え？」

その指の先を追うと。

「ふえええ……」

泣いていた。その緑色の大量の葉っぱをつけた大きな樹の袂。たもと

俺らと同じくらい、いや少し幼いくらいのツインテール少女が

声を殺して泣いていた。

「……」 殺しきれない声が俺の元に届いてくる。

なんだか、急に悲しい気分になってきた。

昔から、誰かの泣いてるところを見るのは得意じゃない。

泣いてる女の子を、なんとかしてあげたい、素直にそう思った。

「聡くん?!」

俺は無意識のうちに少女に走り寄っていた。

「君、こんなところで何してるの?」

数日前に、誰かに言ったことと同じ台詞を少女にぶつけた。

「……」  
「……」  
「けれども少女は反応しない。」

「ひょっとして、あの子迷子なのかな?」  
後ろで智瀬が不安げに見つめている。

「ねえ、君どうして泣いているの?」

「……どうしてそんなこと知りたいの?」

少女は泣くのをやめたが、凄く悲しげな瞳をこちらみ向けた。

「だって……女の子が泣いているのに放っておけないだろ」

「お兄ちゃん、優しいんだね?」  
その瞳は、笑っていた。

でもどこか、遠いところを見つめているような。

「優しくはないけど・・・」

「あたしね・・・」ぎゅっ。女の子は俺に抱きついてくる。

「ちよっとお！ 何してるのよ！ 離れなさいよお」

後ろから、物凄い勢いで智瀬がやってきて少女を俺から剥がそうとする。

「なんで？ お姉ちゃん、お兄ちゃんの恋人さん？」

くりくりとした、丸い瞳で智瀬を見つめる。

「・・・そんなんじゃないよっ」

「じゃあいいよね？ お兄ちゃん！ ぎゅっ」

勝ち誇ったように少女は腕に力を込めた。

「くぅ・・・」 何故か智瀬は悔しそうにつなだれた。

「なあ、そろそろ何があったのか教えてくれないか？」

それから数分、ずっと俺にしがみ付いてた少女を剥がすと問いかけた。

「何がって？」 ほえ？ とした様子で首を傾げている。

「何故君が泣いていたのかを、教えてくれよ。俺でよければ力になるし。」

「・・・そんなの要らない」

「え？」

「そんな“口だけ”の優しさなんて要らない！」

「・・・」

そして少女は首をブンブンと横に振りながら叫んだ。

「皆口だけだ！ パパとママは、ずっと一緒に居るって言うてくれた！

でもママは居なくなつた！ 代わりに一緒に居てくれるって言うてくれた

パパも全然一緒に居てくれない！ お兄ちゃんだってそうでしょ？！

言葉では優しくして、結局いざとなったら皆居なくなるんだ！  
そうでしょ？！」

二本に結んだ髪の毛が左右に大きく揺れた。

後ろで、智瀬はどんな表情でこの言葉を聞いているんだろうか。

「あの子、私と同じなんだ」 ポツリ、智瀬が呟いた気がした。

「お兄ちゃんだって・・・居なくなるんでしょう？」

なら優しくしないでよ！ あたしになんか・・・構わないでよ・・・  
「！..！」

さっきの態度とは一変、今度は俺を拒絶する。

でも、そんな悲しいこと言って欲しくて話しかけたわけじゃない。

だから。

パンッ！！！

「……………?!！」

軽快な音が公園中に木霊した。

女の子は痛む頬を手で押さえて泣きそうになる。

「何するのよ！！ お兄ちゃん酷い！！」

怒りにも、悲しみにも似ている瞳でこちらをキッと睨み付ける。

「諦めんな！！！！！！！！」

さっきの音よりも更に大きな声で叫んだ。



「自分だけ不幸みたいな言い方しやがって！　いいか？」

何かあったかなんて俺は知らねー。でもな、君と同じような思いをしている

人なんて、いっぱい居るんだよ！..!」

そう、智瀬や俺がそうだったように。

「・・・聡くん・・・」

「確かに、俺はずっと一緒には居られない。　だけど、気持ちは気持ちは持ちだけは

友達で居ることができんだよ。　親とかみたいに大きな存在にはなれなくても。

友達として、居ることはできるだろ？　それは近いとか遠いとか関係ないじゃん。

やる前から全て諦めるなよ。　いつか、君を必要としてくれる人が現れるよ」

全く、今思えば小学生の分際でマセた事を言ったものだ。

「お兄ちゃんは・・・あたしを必要としてくれる？」

「もちろんだ。もう俺たちは友達だからな。」

「ずっと・・・“ずっと”？」

「ああ、もちろんだ。」

「傍に・・・“居てくれる”？」

「まあ、限界はあると思うけど・・・できる限りな」

「お姉ちゃんも？」 後ろに居る智瀬に視線を向ける女の子。

「・・・私と貴方は、なんか同じ気がするから・・・」 照れくさそうに頷いた。

「嬉しい・・・」 女の子は声をあげて泣いた。

その涙は先ほどの涙の意味とは違うことなど、明白だった。

.....。

少女は、やはり迷子だった。公園に父さんと遊びに来たは  
いいが

途中ではぐれて、父さんを探し回っている内にこんな奥まで来てし  
まい。

心細くなって泣いていたんだそうだ。

俺と智瀬は、その少女を連れて父さんを探しに出掛けた。

・・・だが、その父さんはすぐに見つかった。

モリコーの散歩道に一人、いびきを掻いて呑気に寝ていたのだった。

灯台下暗し。妙な結末に、思わずズッコケそうになった。

『娘と遊んでくれてありがとうございました。』

父さんはそう言って頭を下げた。

「いえいえ、気をつけて帰ってくださいね」そう微笑む俺に少女はそっと近づき、「お兄ちゃん、怒ってるところもカッコ良かったよ」耳打ちすると、微笑み俺の頬にそっと口付けた。

「なっ・・・」いきなりの事に驚いている俺と智瀬を他所に女の子は

「またね」と手を振る。

『ほら、帰るぞ。 “夏美”』父さんはその名を呼び、少女の手を握った。

去っていく二人の後姿を、俺は惚けた様に見つめていた。

“またね” その意味を、俺はただの友達としてならまたいつか会える

という意味なのかと思ってた。

その言葉の意味を、翌日。 知ることになる。

## 8章 Eパート

帰り道、オレンジ色に染まった風景を智瀬と二人で歩く。

特にこれといった会話はなく、終始智瀬はムっとした表情だった。

いつもの商店街の定位置に着くと智瀬は俯き、俺に問いかける。

「明日も会える？」と。

「.....」

明日、明日はもう帰らなきゃいけない日だ。

朝一の電車に乗って、俺は元の住んでいる町に帰る。

でも、智瀬の瞳は凄く切なげでそんなことは言えなかった。

「ねえ、会える？」 もう一度、同じトーンで問う。

「ああ、会えるぞ」

「本当？ 約束だよ？」 少女は小指を差し出してきた。

「……ああ」その小指に、自分の小指を絡ませる。

ドクン……

指きりを、した。

「ゆうびきった！」女の子は笑顔で指を離すと

「これで明日も会えるね！」と言った。

ドクン……

なんて無垢な笑顔なんだろう。

「あ……智瀬ちゃん……」言おうと思った、でも

「そろそろ、お母さん達が帰ってくるかもだから家に戻るね。バ  
イバイ」

何かを悟ったかのように、智瀬は足早にその場から走り去っていった。

「言えなかった……畜生……」その場で一人佇む。

何とも言えない、モヤモヤした感覚の名前が分からず

俺はただ、ギュッと拳を強く握った。

そして、翌日。

その日は昨日同様晴れていた。不快なくらいに暑かった。

でも、何よりも不快だったのは智瀬ちゃんに“お別れ”を言えなかった事。

俺と母さんは、叔母さんや親戚の叔父さんたち別れを告げると

二人で肩を並べて駅まで歩いていった。

肩を並べてっっていうのも、変かもしれない。

まだ当時小学生の俺と大人の母さんじゃ、背丈の差があり過ぎたから。

.....。



・・・。

駅に着いた。

そこは小さな駅で、切符の自動販売機と線路への進入用と出口用の片道ずつの

自動改札があるだけだった。

切符は今買った。後は、この改札を通るだけ。

この改札を通ってしまえば、もうこの町には来年まで戻っては来れないだろう。

「さあ、行こう?」　ポーッと改札を見つめていた俺に母さんは背中を押す。

「うん、そうだね…」　行こう、立ち止まっても仕方ない。

俺が改札を通ろうとした、その時だった。

「どこへ行くの?…!」

後ろから、女の子の声がしたんだ。

「!」 その声に、咄嗟に振り向く。

そこには、肩で息をして苦しそうにこちらを見つめる智瀬がいた。

「智瀬……ちゃん、どうして……」

「ねえ、どこ行くの？」 智瀬はそう問いかけながら俺に近づいてくる。

「……」 俺は答えることができず、俯く。

「あれ、この子。まさか……」 母さんが眉をひそめる。

「違うよ! この子は……」 言おうとして八つとした。

この子は、なんだ？ 俺のなんだ？

ただの知り合い？ それとも友達？ それとも？

分からない、全てが曖昧な感じだ。

「私は、聡くんの彼女だもん!!」 智瀬は叫んだ。

「なっ……!!」 思わず固まる俺。

「ちょっと待ってよ、いつから俺たちは恋人に？」

「今は違うけど……聡くんは……さと君は私の未来の恋人さんなの!!」

ギョッとワンピースの裾を掴んで俯く。

「智瀬……ちゃん……」

「ねえ……行っちゃうんでしょ？」 俯いたまま、声を震わす。

「……うん」

そうか、智瀬は全部知っていたんだ。 俺の昨日の様子から悟ったのだろう。

全部、知っていて。 笑顔を見せて、我慢していたんだ。

「なら、約束して」 智瀬の頬から、光の軌跡が伝った。

「約束……？」

「また会うことが出来たら……私と今まで以上に一緒に居て。」

そして、私と・・・恋人になつて・・・？

それを約束してくれたら、お別れがなかった事許してあげる」

ポタポタと、堰を切つたように溢れ出してくる。

初めて出来た友達だ、居なくなるのが寂しくない訳ないじゃないか。

多分今の俺には何もする権利はないかもしれない。

こうなると、智瀬が悲しむことになるを知っていて言わなかったんだから。

それでも、俺に出来ることは。

「うん、約束する」

そう言つて、頭を撫でてやることだけだったんだ

。

.....  
.....

「・・・ねえ、パパ。」

少女は父に問う。

「なんだ？」

「あの人が、あたしのお兄ちゃんなんだよね？」

その視線の先を、うつとりとした表情で見つめながら。

「ああ、そうだ。今日からお前の家族になる人だ。」

「ふふ・・・写真で見たことはあったけど実際に会ってみても良い人だった」

「ああ、あの公園のときか。確かに、兄にするには申し分ないかもな」

ハッハッハ、と父は笑った。

「……ふふっ、これから“お兄ちゃん”と過ごせるなんて……

あたし、すごく楽しみ。」

その笑みの裏で、黒い感情が渦巻く。

何が『恋人になって』よ、あの女……そんなことあ  
たしが許さない。

だって、先に“約束”したのはあたしなのよ。

ずっと傍に居てくれるって、約束したのはあ

たしとなのよ。

お兄ちゃんは“渡さない”。

絶対に。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

泣いている智瀬を宥め、今回はきちんとお別れをした。

また会おうね。　そう言って智瀬は手を振ってくれた。

電車に乗り込んだ俺を待っていたのは、昨日の少女、夏美とその父さんだった。

いきなりだった。

どうやら、前から夏美の父さんと俺の母さんは昔からの知り合いだったらしく

結婚を機に会わなくなっていたらしい。

でもお互いに、一人身になった時からまた再会するようになって。

気がつけば、お互いに惹かれあっていたんだそう。

「さあ、聡。 今日からこの人がお父さん。 この子が妹よ。」

そうやって二人を電車の中で紹介されたときには、度肝を抜かれた。

何せ、その二人は昨日モリコーで会っているんだから。

家族が増える分には嬉しい、そして同時に昨日の夏美との約束も果たせるから。

これは、嘘にならなくて済むから。

でも、一言くらい相談しても良かったと思うのだが。

いきなり再婚するとか言われても、普通混乱しますよ。 母上。

電車の中で、夏美は昨日とは違う。 どこか恍惚とした笑顔で俺に笑いかけた。

「お兄ちゃん、あたしの傍にずっと居てね。」





## 9章Aパート

「そうか・・・お前・・・」

同じベッドに腰掛けて、こちらを見つめている夏美を見つめ返す。

「思い出した？」

「ああ・・・全部」

「そっか、良かった」

「俺とお前は・・・血が繋がってなかったんだな」

「そうだよ、お兄ちゃんはお母さんの連れ子。あたしはパパの連れ子。」

「そして、俺とお前そして智瀬は小さい頃に会ってたんだ」

「そうか、それで智瀬は告白の際“やっと勇気が出せた”なんて言うてたのか。」

「そうだよ」

「そして、俺たちはそれぞれ約束を交わした・・・」

「でも、その約束はあたしの方が先だった」

ギシツ 深く腰掛け俺の肩に頭を乗せた。

「夏美・・・」

「あたし、お兄ちゃんと会う前から何回かお兄ちゃんの事を見てた。

お兄ちゃんは、あの日始めて知らされただろうけどあたしはずっと前から

知ってた。 もうすぐ自分に“お兄ちゃん”ができることを。

パパが、自慢げに言うの。 次のママは美人さんだぞって。

携帯の写メでその姿をたまに見せてくれた、そこに写ってたのが、  
あなただった。」

「俺の姿を知っていた？ なら何故あの公園の時、黙ってたんだよ  
？」

「ごめんね？ お兄ちゃんが本当はどんな人なのか、試したの。」

「それで、その試した結果は？」

「当然、合格。カッコいいだけじゃなくて、優しい人なんだなっ  
て思った。」

「・・・優しい、か。」

「だから、あの時から・・・絶対あの女よりもずっと前から。」

お兄ちゃんのこと・・・」

「おわっ」 バタン、急に俺の体はベッドの上に沈んだ。

「・・・」 俺を押し倒した夏美は顔を上気させてこちらを  
見つめる。

その瞳に、一瞬吸い込まれそうになる。

「お兄ちゃん・・・あたし・・・もう我慢できないの・・・」

「ちょ・・・お前・・・」

着ていた上着を脱ぎ始める。

「待て……今日はそんなこと“しに”来た訳じゃないだろ？」

ほ、ほら。『でーと』したいんだろ？」

「……………」

そんな俺の言葉には耳をかさず、夏美は脱ぎ、とろとろ下着一枚になっ  
てしまっ。

「ねえ、お兄ちゃん。“したい”んでしょ？」

夏美は汗ばんだ俺の掌を掴むと、自分の胸に押し当てた。

「……………!」

触ったことのない、柔らかな感触にどうしたらいいか分からなくな  
る。

「っ…………、ほらもっと触っていいんだよ…………？」

トクン…………トクン…………トクン…………。

「だって、俺ら兄妹……」

ハッとした。 そうだ、俺たちは血の繋がっていない。

今まで大きな壁となっていた。 でも事実を思い出してしまった以上

俺たちの前に、そんな壁はもう。 どこにも存在しない。

トクン……。

怖いくらいに。

胸が。

高鳴っていた。

こいつ……こんなに可愛かったっけ……？

フワフワして、もう何がどうでもいいように感じた。

「お兄ちゃん・・・好きなの・・・」

「?!」 恥じらいと、憂いに満ちている。 その瞳は・・・。

『あなたが好きでした』 あの時の智瀬の瞳と同じだった。

ドクンっ。

唐突に、胸の高鳴りは痛みへと変わった。

「お兄ちゃんの全部を、あたしに頂戴・・・？」

ドクンっ。

どこかで、智瀬が泣いている。 そんな気がした。

「……」 俺は無言のまま、その柔らかな感触から手を引いた。

「えっ……お兄ちゃん……」

「服を着ろ、馬鹿」 俯き、俺はベッドから立ち上がる。

「どうして？ お兄ちゃん！」

「……」

ダメだな、こんな状況になっても智瀬あいつのことばかり考えてるじゃないか。

俺って、こんなにも女々しい奴だったのかよ。 心の中で苦笑する。

「どうして？ あたしじゃダメなの？ あの女がそんなにいいの？！」

お兄ちゃんのことだったんだよ?! いっぱいっっぱい傷つけたんだよ?!

約束だって、あたしの方が……!!」

「分かってる……!!」 夏美の言葉を一蹴すると、俺は部屋のドアへと歩いていく。



「どこに行くの?! ねえ、お兄ちゃん!」

悲痛な叫びは、俺の耳に届いていた。でも、その声に対して優しい言葉なんか

かけられなかった。そんなことしても、結局夏美を傷つけてしまう。

「分かってるから、夏美。少し考えさせてくれ。」

俺はそう言つと、振り返らずに部屋を出た。

正直、頭が混乱している。自分の気持ち、分からない。

.....

.....

「ちっ……あの女……」

下唇を強くかみ締める。

あんなことしておいて、まだお兄ちゃんを苦しめる気？

許さない、あたしからお兄ちゃんを奪った挙句

お兄ちゃんをつって、傷つけたくせに。 尚もお兄ちゃんの心の中に居座るなんて。

お兄ちゃんは、あたしのモノ。 好きになるのは、あたしだけ。

許さない。 許さない。 許さない。 許さない。 許さない。

許さない。 許さない。 許さない。 許さない。 許さない。  
・ 絶対的に。

## 9章 Bパート

「はぁ・・・」

辺りは暗く、

月明かりの中、風が揺らす木々からはセミとひぐらしの鳴き声が交差している。

その鳴き声が夏の夜を静寂から強制的に隔離しているような気すらもする。

“今のお前に、静寂の時間なんて贅沢すぎる”

そう誰かが言っているような変な感覚に陥りそうになる。

俺はため息をついて建物の天井についている十字架を見つめた。

もうそんなに時間が経ってしまったのか？

ていうか、

なんで此処なんだよ、と心の中で苦笑する。

駅まで歩き、電車に乗って。そして更に歩く。

いきついた場所は、あの教会の前だった。

なんとなく、本当になんとかなく。 此処に来ればこのモヤモヤした  
気持ちに

整理がつけれるような気がしたから。

いや・・・或いは、ただ俺はまだ智瀬に未練があつて

その思い出に縋りにきただけなのかもしれない。 それって、かな  
り女々しい。

「はぁ・・・」再度、ため息をついた。

ここに居ても仕方ない。中に入って、恋女神様アマレトにでも祈りを捧げようか。

嘗て、智瀬かうがそうしたように……。

と、思ったのだがよくよく見ると両開きのドアの片方が開いていた。

誰か居るのか？ まさか、あの老神父が閉じ忘れたとかじゃないだろうな。

歳の所為でボケてきたのか？

いや、でも知らない人が居たら少し怖いな。

気配を殺して、恐る恐るドアに近づくと開いている隙間から中を覗いた。

暗くてよく見えない、でもなんとなくそのシルエットは覚えていた。

「智瀬……？」 誰かが胸の前で両手を握り、恋女神像に向かっ

て祈りを捧げていた。

俺には、なんとなくそれが智瀬のような気がした。

…雲が動き、先程よりも月明かりが強いものになる。

天井に飾られた、ステンドグラスから漏れる光が比例して強いものとなる。

赤・緑・青。 様々な光がその祈っている人の姿を照らし始めた。

「……!!」 ハッキリと見えた。 その後姿は……。

「智瀬……」

俺の脳裏にあの日の光景が、言葉がフラッシュバックする。







何故今更祈りを捧げている？ 恋女神にだぞ？

俺とはもう終わっているはずなのに、恋人関係はただの罰ゲームだったのに。

ただ日々の平和を祈っている？ いやそんな表情ではない。

なんで、そんな顔して祈っているんだよ？

なんで今更、恋女神になんて……。

まるで、再び“鳴る”のを望んでいるかのような……。

でも、そんなの……。

そんな自問自答を繰り返しても、答えは分からない。

本当に、分からない事だらけだった。

## 9章Cパート

「お前、こんなところで何やってるんだ？」

俺は意を決して、智瀬の元へ歩み寄るとそう問いかけた。

「へっ?!」 驚いたようにこちらに振り向く。

「え、なんでここに・・・」 そしてトーンを落とす。

「なんとなく」

「そう、なんだ」

いや、本当になんとなくだったんだけどね

ただ、気持ちの整理をつけたいからとは言わなかった。

これを言ってしまうと、また智瀬を混乱させてしまうと思ったからだ。

そんなことより、俺には気になることがあった。

「それはいいけど、「ごめん」教会で何をしてるんだ？」

「え、何って・・・何もしてないよ」

「ん？ そうなのか？ 俺にはまた“祈り”を捧げている様に見えるけど。」

女神像に視線を移す。

つられて智瀬も視線を移した。

「・・・・・・・・」 智瀬は暫く黙った後、俺に視線を戻してこう言った。

「私も、本当になんとか来ただけだから」と。

「・・・本当に？」 来ただけ、ならなんであんな悲しい顔してたんだよ。

「・・・・・・・・うん」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「しつじき」

そう言つと、ペチンツ！と俺は智瀬のオデコにデコピンをかましてやる。

「ふあっ……」 痛そうにオデコを抑える。

「うそつくなよ」

「うそなんか……ついてないもん」 さっきまで平然を保っていた顔が

徐々に歪んでいくのが分かったから。 だから、俺は思ったんだ。

「智瀬、俺に対して素直になつてないだろ？」

「……」

「何か理由でも、あるのか？」

「……」

「俺が何か悪いことでもしたのか？ 怒らせるようなことしたのか

「？」

「それは、違う・・・」 蚊の鳴くような声で呟く。

「なあ、智瀬。俺の素直な気持ちを言ってもいいか？」

「え・・・？」

「俺さ、どうしても今までの関係が罰ゲームの延長戦だっと思えないんだ。

いや、ひょっとしたら思いたくないだけなのかもしれないけど。

とにかく、このままじゃ嫌なんだ。こんな訳も分からないまま“サヨナラ”なんて。

あんまりじゃないのか？ 少しは俺の気持ちも・・・」

「さと君に何が分かるって言うの！？」

智瀬の顔は最早平然とは程遠く、苦痛に歪んでいた。

「・・・・・・・・」

「私が何を悩んで、何を考えて。どんな思いでさと君と過してきたと思うの?!」

「それは・・・」

「分からないでしょ?」

「でもそれは、智瀬が言ってくれなかったから・・・」

「じゃあ訊くけど、“訊こうとして”くれた?」

私の気持ちとか、様子とか。少しでも気がついてくれてたの?!

言わなきゃ分かんない? 違うよ、あなたが私を見てなかったんじゃないの?

私のこと、ちゃんと見てくれてなかったんじゃないの?」

「・・・・・・・・」

否定は、出来なかった。智瀬を見ていなかったというよりは

俺は現実を見ていなかった。智瀬の気持ちや、夏美の気持ち。

知っていて、向き合おうともせず逃げていた。

その末路がこれだ。俺にそれを否定することなんて、出来っこない。

「それでも俺は、智瀬が好きなん・・・」

「今更彼氏面しないでよ！！ もう、私のことなんて放っておいて！！！」

膝から崩れ落ちて、泣き始めてしまう。

「智瀬・・・ごめん・・・」

そつだ、俺が今すべきなのは言い訳や御託を並べることじゃない。

「・・・っ。ちよつと！！！」

俺は蹲る智瀬を後ろから抱きしめていた。

「うめん。本当にうめん。」

そう今俺がするべきなのは、この気持ちを伝えることだけ。

「……………」 智瀬は俺の腕を解くこともなく、ただ静かに泣いていた。

「凄く傷つけてごめん。凄く、辛い思いをさせてごめん。」

でも、俺やつぱり智瀬じゃないと嫌なんだ。どんな時でも智瀬の顔ばかり

思い出すんだ。」

「……………」

「今まで忘れててごめん。昔のこと、全部思い出したんだ。」

罰ゲーム、なんて嘘なんだろう？ だって

智瀬は“あの日の約束”を、ちゃんと守っていてくれたんだもん  
な。」

「……………思い出したの?」



「ああ……ごめん……」 ギュッと腕に入れている力を強くする。

「……そうなんだ」

「今更こんなこと言うのも、都合よ過ぎると思う。」

勝手な奴だと思ってもらって、構わない。もし、少しでも

俺のことを好きでいてくれるなら…もう一回だけ、俺にチャンスをくれないか？」

「……」 智瀬はゆっくりと俺の腕を解くと立ち上がり俯く。

「ダメ、なのか？」 俺も立ち上がると智瀬に向き合う。

「私も、さと君が好きだよ。」

あなたの言うとおり、罰ゲームっていうのも嘘。」

「だったら……!!」

「でも、ダメなの」

いつか見た、スカートの裾をギュッと両手で握り締めている智瀬。

辛そうな、それでいて悲しそうな。そんな重圧に独りで耐えている様な顔。

「どっして?！」

「・・・そうだね、いつまでも隠しておけないよね」

智瀬は両腕でグシグシと涙を拭くと唐突に、上着を脱ぎ始めた。

「わっ、いきなり何してんだよ!！」　いくらなんでも、そんな展開はっ。

心の準備ってものが・・・。

「さと君、私をしっかり見てほしいの。」

智瀬は、真っ直ぐに俺を見つめた。先程の涙はもう濁っている。

「・・・え、ああ」　その表情はあまりにも真剣で。

そんな俺の脳裏に一瞬浮かんだ“それ”とは全然違う雰囲気。

これは、なんだかマジだ。

上着を脱ぎ、下着一枚になった智瀬。

「……………」

男の習性だろうか？ 視線がつい胸元にいつてしまう。

「恥ずかしい……………」

頬を真っ赤にしながらも、少し苦痛にも似た表情をしている智瀬。

智瀬の胸元は、大きくはないけど俺にとっては十分な膨らみがあった。

上の下着が音を立てずに落ちると、俺は目を見開いた。

「え、なんだよ。これ？」

胸の谷間、その中央辺りに2センチ程の切り傷らしき痕が

やや斜め気味に、茶色く残っている。

「……………」

「この傷……どうしたんだよ？」

初めて見た、智瀬の胸。普通男なら喜ぶ（？）ところなんだろう。

でも、その初めては俺にとって一番辛いものになるうとは……。

「この傷はね……」  
智瀬は悲しく笑った。

## 9章Dパート

「この傷はね・・・」

その言葉に、俺は耳を疑った。

「え、そんな。まさか？」

「信じられないよね、そりゃいきなりこんなこと言われても」

恥ずかしいのか、いそいそと下着を付け直す。

「でもね、私嘘ついてないんだよ」

「・・・」

「さと君、覚えてるかな？」

上着を着直した智瀬は、女神像の近くにあつた木製の小さな椅子に腰掛けた。

「私、少し前まで水泳部員だったんだよ？」

「ああ、知ってる」

流石に、そんな前でもないことは忘れない。

智瀬は泳ぐのが得意で、一年の頃から水泳部に所属して一生懸命に練習に

励んでいた。

その努力の甲斐があって、かなりのいい成績を残していたと風の噂で聞いている。

智瀬が『今日はとっても良い記録が出たんだ』とよく笑っていたのを覚えている。

3年生になり智瀬は功績と真面目さが、かわれ部長になった。

『部長、うまくやれるかな？』なんて不安そうなくせに、大好きな水泳部を

引っ張っていけるのが嬉しくて堪らない、そんな風に目を輝かせていた。

それなのに、智瀬は。

「でも、私辞めちゃったでしょ？」

そう、今年5月の中頃に智瀬は突然水泳部を辞めてしまった。

「そうだったな・・・」

退部届けを出した、と打ち明けられた日。

俺はびっくりして『なんで辞めちゃったんだ？ あんなに好きだったのに。』と

問うたことがあった。

けれども、理由は『ちょっと、いろいろありまして』と結局はぐらかされて

まともな答えを貰えずにいたんだ。

「もしかして、その傷の所為？」

「うん、そういふこと。」

「そして、その傷は……」

「うん。夏美ちゃんにやられたの」

改めて聞くと、先程より強く。

鈍器で頭を殴られたかのような鈍い痛みが俺を襲った。

智瀬は少し俯き気味にこう言った。

「あの日、私が退部届けを出す少し前。部室で部活の片づけをしていたの。」

「一人でか？」

「うん、私部長さんだから皆より頑張らないといけないから。」

勘違いしない？ 押し付けられたとかじゃないの。私が自主的に皆を先に

帰しただけのことなんだから。」

「……そうか」

「うん、それでね。片付け終わって、着替えようと思って更衣室



に行ったの。

水着を脱いで、下着を着けて。その時にね、ドアがいきなり開いたの。

びっくりして、そのドアの方向に体を向けたらね。

目の先から私の胸の方まで、パって光が走ったの。」

「光？」

「うん、光。光が自分の体目掛けて突き刺さってくる感じ。」

それでね、気がついたら胸元に紅い線が出来てて痛くて。

なんだろうと思ったら、知らない女の子が立ってたの。

この学校の制服で、どこか見覚えがある顔で。」

.....

最初は分からなかった。

でも、その女の子の一言でピンときたの。

『久しぶり。 智瀬先輩。 お兄ちゃんは、どこ？』 って。

前々から、さと君に新しく両親が再婚して妹が出来たことを聞いていたから。

そして、この学校に入学してきていたことも。

本当にあの時以来の、久しぶりの再会だった。

『お兄ちゃん？ ……さと君の事？』

じゃあ、あなたひよつとして……………」

『覚えててくれたんだ？ 嬉しいなあ、それでこそあ……………」

夏美ちゃんの手には、カッターナイフが握られていた。

そのカッターナイフが私に向けられた。

そして、こう言ったの。

『殺し甲斐があるってもんよね』って。

『え、ちよつと待ってよ』

ゾクっとした。

手に刃物を持っている人が言ったら洒落にならないよ。

『だって、さっきの一振りで“やる”つもりだったのに。

あたしとしたことが外しちゃうんだもん』

クスクスと楽しそうに笑う。

『さっきのって・・・まさか今のって・・・』

ズキズキ、胸が痛み出した。

血も出てたと思う、どのくらいかは分からない。

でも、とにかく痛かったのは覚えてる。

『そう、あたしがこのカッターで斬りつけたわけ』

『どうして？ 私あなたに何かした?!』

『ええ、したよ。』

『何をしたって言うのよ!』

『あたしから、お兄ちゃんを奪った。それだけで万死に値するわ』

『奪ったって、私はそんなつもりじゃ・・・』

『それに、胸にそんな傷。お兄ちゃんに見せれるかな?』

『それは・・・』

『見せても良いよ? でも、お兄ちゃんが真実を知ったとき

お兄ちゃんは、あたしを嫌うのかもしれない。

でも、あなたはそんな事できないよね?

その傷を見せて、お兄ちゃんに全部事実を伝えて。あたしとお

兄ちゃんの

仲を壊してまで“セクシャルビヘイビア性行為”できないよね??」

『・・・それが、目的だったの?』

『さつきも言ったけど、あたしの目的はあなた・・・っていうかは

あたしとお兄ちゃんの仲を邪魔する人をコロすこと。

今日のは警告。 ゆっくりゆっくり、あなたをコロしてあげます。

』

不敵に笑う。

『・・・なんで・・・こんなことするの・・・』

『何回も言わせないでよ』

『あなた、さと君のこと好きなんでしょ? ならどうして、その好きな兄の

幸せを見守ってあげるとかできないの?』

『・・・』

『私は別れないよ、あなたもさと君が好きかもしれないけど。』

私もあなたに負けないくらい、さと君が好きだもの。』

『………付き合ってもらえないわ。でも、分かっている最後に  
“勝つ”のはあかし。』

『ちよつと………どこ行くのよ?!』

そのまま、夏美ちゃんは更衣室から出て行った。

それ以来、私はこの胸の傷を皆に見られたくない為に水泳部を辞めた。

そして、さと君。      あなたとの関係を“進める”事も辞めた。

進めてしまえば、何れこの傷を見せることになる。

その時に、私は嘘を付けるほど器用な人間じゃないから。

そうしてしまうと、表面上だけでも仲良く出来てる3人の関係が壊れてしまうから。



## 9章 Eパート

「そうか、そういうことが・・・」

義理とは言え、自分の妹が人を。

しかも自分の彼女を傷つけて、『コロす』とまで言ったなんて。

今までの俺だったら絶対に信じなかっただろう。

でも、ここ数日の二人の様子を見ていて

智瀬が嘘をついているようには、思えなかった。

・・・だからこそ、腹が立った。

今まで何もして来なかった自分に、そして智瀬に傷を負わせた夏美に。

「ごめんな、俺全然知らなかったよ。」

「謝る必要はないよ。でも、辛かった。」



「私がさと君と会うだけで、夏美ちゃんを裏切っているようで・・・」

「裏切るも何も・・・最初から智瀬が俺の彼女なんだからいいじゃんか」

「そうなんだけどね」 智瀬は苦笑いした。

「夏美ちゃんの言うとおり、仲良くやっている兄妹あなただけの仲を壊したくはないから。

だから、私はさと君との関係を出来るだけ進めないように我慢してきたつもり。」

「・・・・・・・・」

「でもね、最近やたら夏美ちゃんが貴方にアピールしてくるから、ヤキモキしちゃって。」

それに、私だってごく普通の一人の女の子だよ？

好きな人だったらキスもしたいし、それ以上だって・・・」

そこで、智瀬はグッと口を噤んだ。

「・・・・・・・・」

そうか、俺と夏美の為に色々我慢してきたんだ。

“したかった”のは、俺だけじゃなかったんだ。

俺は、とんでもない勘違いをしていた。

智瀬は、俺との交際を辞めたいんじゃない。

辞めなきゃと、そうしないと俺と夏美の関係がいつか壊れてしまうからと。

そうやって自分を責めていただけだったんだ。

「とつくに壊れてるさ」

「え？」 俺の声に八つとなり顔を上げる智瀬。

「夏美あいつとの関係なんざ、とつくに壊れてるのさ。」

「……………」

「と言っても智瀬の所為じゃない。 今まで全てを曖昧にしてきた俺の所為。」

だから、智瀬が自分をそこまで責める事はないよ。」

「私、どうしたらいい？」 次第に目が潤んでいく。

「私、さと君が好きなの。でもね、さと君と夏美ちゃんが仲良く笑い合ってるのも

好きなの。両方好きなの。どっちかをとりたくなんか？  
ないの」

「……………」

どっちかをとってしまうと、どっちかを傷つけてしまうから？

そうだな、前の俺もそう考えていた。

「でも、こうなった以上。俺は答えを出さなきゃいけない。」

もう、全てを終わらせよう。

「……………さと君」

「ごめんな、今まで」

もう、智瀬にこんな悲しい顔をさせてはいけない。

だから……………。

「俺は夏美を普通の妹に戻す」

「戻す・・・？ 昔の関係に戻るの・・・？」

夏美ちゃん、いざとなると何するか・・・この傷だって・・・」

胸元に手を押し当てて顔を歪ませる。

「大丈夫だ」

「え・・・？」

「その時はこの命に代えても、智瀬を守る。」

今更こんな、齒の浮くような台詞を言う資格などないかもしれない。

「ダメだよ・・・そんなの・・・」

でも、これが俺の答え。

「だから、これからも俺の傍に居てくれないか」

今までの二年間を、そして過去の数日間を。 嘘にはしておきたく

なかった。

「さと君・・・本当に私でいいの？」

「・・・・・・・・」

俺は答えなかった。

「ん?!」

智瀬の顔にそっと、自分の唇を重ねる。

柔らかい、そしてしっかりとした熱気を纏っている。

刹那、驚いたように目を見開いていた智瀬だったが

状況を把握したのか、ゆっくりと目を閉じて俺の腰に腕をまわす。

「・・・・・・・・」

間近で見る、智瀬の顔。

涙やいろんなもので、ぐちゃぐちゃになっている。

ああ、こんな顔をさせてしまったのは俺だ。

ごめんね。

でも、その顔を見れたからこそ俺は一番大切なものに気がつけた気がする。

バタツ……、そのまま床に倒れ込む。

「あつ……う……」

今まで出来なかった、“それ以上の行為”。

俺達は、もう止められなかった。止める必要など……なかった。

全てを知った今、俺に躊躇はなかった。

「……………っ！！！！！！」

……………。

……………。

俺たち二人は、誰も居ない月明かりが射す教会の奥。

お互いの身体を密着させた。

相手の体温が肌で直に伝わってくるのが、とても嬉しかった。

やっと、俺たちは“進むこと”が出来たんだ。

本当に私でいいの？ 智瀬の問いに俺は答えなかった。

代わりに、俺の体温や感触で“応えた”。

言葉でいうのは簡単だ。でも行動して気持ちを表すのが

之ほど時間がかかって、これ程度胸が要ることだとは。

智瀬を優しく抱き留める。

この時間がずっと続けばいいのに、本当にそう思える程に。

スタンドグラスから、差し込む七色の光は

とても、優しく俺たちを包んでいた。



.....

.....

「コロす.....」

ごめんね、お兄ちゃん。

あの女、約束破った上にお兄ちゃんと“しちやう”なんて。

もう生かしてはおけないよ。

絶対にコロしてあげる。

ふふふ.....

□□す。

□□す！

□□す！！

□□す！！！！

今、□□してあげます……。

智瀬先輩……。

そして少女は、銀色の矛先を指でそつとなぞった



## 最終章 A パート

.....

.....

あれから、どれくらいの時間抱き合っていただろうか。

二人の気持ちを確認できたのが嬉しくて、互いに離れがたくなってしまった。

「ちょっと寒くなってきたね」 智瀬がそう言って身震いする。

真夏とはいえ、夜は肌寒い日もある。

ましてやずっと服を着ない状態だったから当たり前なのかもしれない。

「そうだな・・・いい加減服着るか？」

智瀬の身体を見れなくなるのは、ちょっと惜しい気もするが。

「うん、そうだね」 智瀬は立ち上がり、地面に転がっていた服を手取る。

俺も後に続くように放ってあった自分の服を掴む。

.....

さて、着替え終えた所で智瀬は俺の目の前にやってきて真っ直ぐに見つめてきた。

420

「さと君、これからどうするっ..」

「..どうするっ..」

「だから、その...夏美ちゃんのこと 言い辛そうにモコモコとしている。」

「ああ...それなら心配ない。」

「え?」

「夏美の事は、俺が何とかする」　そういつて頭を優しく撫でてやる。

一瞬くすぐったそうに笑ったが、すぐに不安な表情に戻る。

「でも・・・」

”　（あなたをコロしてあげます）　”

「あの夏美ちゃんの目は・・・本気だったような気がする・・・」

「智瀬・・・」

「私、怖い・・・どうしたらいいのか分からない・・・」

智瀬は自分の腕で自分の肩をギュッと抱いた。

「さと君の事は好き。　誰にも取られたくないし渡したくない。

でも、さと君と居ること夏美ちゃんが何してくるか分からない・・・

もしかしたら本当に……」

キュッと口を紡ぐ。

多分、その先は怖くて言いたくないんだろう。

大丈夫、俺がそんなことさせない。　そう言おうとした、その時。

「……許しませんよ、先輩」

聞き覚えのある声、いつもよりドスの利いている声が入り口の方から聞こえてきた。

「夏美……ちゃん」

智瀬は一気に表情を強張らせた。

教会の入り口には、髪をポニーテールにまとめた夏美が立っていた。

「……」

俺は知っている、夏美の髪がポニーテールになる時は……。  
とてつもなく機嫌が悪い時だった事を。

「お前、いつからそこに……」

「最初から居たよ？ えつとねえ……お兄ちゃんがぁ……ふふ……。」

先輩とお……うっふふふふふ……あっはははははははははは。

何が可笑しいのか、笑い交じりに俺に言った。

「内緒の話をしてるところからぁ……ぜえんぶ！！！！」

「……！！！！」

夏美は智瀬を睨みつけた。

なんとという事だ、最初から“今までの事”を一切見られていたという事か。



「約束しましたよね？ 先輩、この事はお兄ちゃんには黙ってるって。」

なんで話しちゃったんですか？」

つかつかと、智瀬の前にやってきて不敵に笑う。

「……なんでって、黙っていてもいつかはバレるんだし……」

「あたし言いましたよね？ 最後に勝つのはあたしだって。」

「……?」

「そして、こうも言いました。あたしとお兄ちゃんの仲を邪魔する人はコロすと。」

「おい、夏美まさかお前!？」

肩をグッと掴み、夏美の体をこちらに向けた。

「お兄ちゃん、待っててね。今邪魔者を消すから。」

「……!!」 狂っている。

夏美の顔はもう明らかに正気を窺えなかつた。

「夏美！！ 正気を取り戻せ！！ おい、夏美！！」

必死に肩をグラグラと揺らす。でも智瀬は笑って

「お兄ちゃん、どいて？」と言うのだ。

「・・・くっ」力なく、俺は夏美の肩から手を離れた。

俺には・・・何もできないのかよ・・・！！！！

「さて、先輩。もうお兄ちゃんのこんな顔は見たくないのよ」

夏美は持っていたバッグに忍び込ませていた果物ナイフを取り出す。

ナイフが月明かりに照らされて、キラリと不気味に光った。

「！！ 嫌！ 来ないで！！」

突然の事に、智瀬は腰を抜かしてしまいその場にお尻から倒れこむ。

「大丈夫ですよ、痛いのは最初だけです。すぐに楽にしてあげます。」

「嫌！！ 助けて！！」 智瀬の瞳からは大粒の涙がこぼれていた。

「夏美！！ やめろ！！」 叫ぶも、今までに無い経験で俺も恐怖していた。

口先とは裏腹に、体が全く動かない。

くそ……俺ってこんなに根性なしだったのかよ……！！

「うふふふ……」 もうそんな俺の言葉も届いていないようだった。

「嫌……来ないでえ……」

「先輩、最期の機会です。 あ、こういう時って冥土の土産って言うんでしたっけ？」

特別に良いことを教えてあげます。」

「………?」

「先輩のお母さん、最近帰ってこないでしょう?」

「……なんで夏美ちゃんが知ってるの……? まさか……?」

「そう、あれはあたしのせい。 あたしね、貴方のお母さんが“邪魔”だったから

「口しちゃった」

「?! でも、お母さんからメールはちゃんと・・・」

「ああ、あれ？ あれはあたしが送ったんだよ？」

「・・・・・・・・！！！！！！！！！！」

「夏美、お前・・・・・・・・！！」

そんな大変なことを、サラリと微笑みながら言っている。

本気で狂っている・・・。

「じゃあ・・・お母さんは・・・」

「そ、今頃あの世かな」

「そんな・・・そんなあ・・・・・・・・！！」

智瀬は首を小刻みに横にフルフルと振る。

「嘘よ……なんでお母さんまで……」

「嘘じゃないわ。貴方のお母さんったら、全力で貴方とお兄ちゃんのを応援」

「してるんだもの。もう腹が立って。それで邪魔だったから消したの。」

消した、そう消したんだ。

夏美にとっては、ロウソクに点いている火を一本消したに過ぎないのだ。

俺らとは感覚が、違いすぎる。

「お母さん……ごめんなさい……」 ボロボロと涙を流す智瀬。

……智瀬の所為じゃない……そう言ってやりたかった。

でも、今の状況で言ってもそんな言葉気休めにもならない。

「今、お母さんのところに送ってあげるからね？」

夏美は智瀬との距離をゆっくりと縮めた。

「……………」 智瀬は嗚咽を漏らしている。

夏美が近づいても、さっきみたいな抵抗はしなかった。

まるで、全てを諦めてしまったかのように。

「…………夏美、やめろ!!！」

動け、俺の体!! 足、動け!!!!

「先輩、お兄ちゃんとの“恋人ごっこ”は楽しかったですか？」

あの世でも、お兄ちゃんみたいな人が見つかるといいですね?」

「……………」

「夏美!!!! 智瀬!!!!」

「先輩。 それでは……………」

智瀬の前までやってきた夏美は、しゃがみ込み。

座り込んでいる智瀬を立ち上がらせた。

「……………」  
智瀬は俯き、無抵抗なまま涙を瞳から落とし続けた。

智瀬は小さく“ごめんなさい”と

何度も呟いているようにも見たのは俺だけだっただろうか。

「夏美、やめろお!!!!」

「先輩、バイバイ」

そして、銀色の矛先が智瀬の身体に向け、伸びて

61  
<

o



## 最終章 B パート

.....

.....

それから、3年の月日が流れた。

俺は、とある墓石に線香をあげ、合掌していた。

「.....」

五月蠅いくらいに蝉の鳴き声が響く中、俺に一人の女性が近づいてきた。

「もう、あれから3年経つのね」

そう言って空を見上げる。

「ああ、もう3年だ」

「・・・」

「どうした？」

「後悔、してない？」

「してないと言えは嘘になるかな。 あんなことになっちまって。」

「そうだよね、ごめん」

「謝るなよ、お前は悪くないじゃんか」

俺は“あの出来事”があつた8月10日には毎年

この“彼女の居場所”<sup>とじろ</sup>に来るようになっていた。

もう、それもこれで3度目になるんだな。

丁度盆の時期と重なって墓参りには絶好の期間でもある。

「救えなかったね……」

「何をだ？」

「何もかも、あの子の気持ちも何もかも」

救う。俺にそんな資格はない。

「まあ……これで良かったなんて、嘘でも言えないよな。確か  
に。」

「……うん」

「でもさ、“あいつ”が居たから俺たちは今こうして居られるのか  
もしれない」

「そうかもしれないけど……」

女性はそっと、墓石に彫ってある名前を撫でた。

「でも、どうしても自分のせいだと思えちゃうんだよね」

そう悲しく笑って。

「・・・馬鹿、悪いのは俺だって何回も言っただろ？」

俺は優しく女性の頭を撫でてやる。

「本当、そういってこ変わってないよね？」　くすぐったそうにそ  
う笑った。

「当たり前だ、俺は俺だ。でも・・・」

墓石を見つめて俺は言った。

「あいつ」の言った言葉は・・・絶対に忘れない。

今回のことで学んだこと、感じたことは絶対に忘れない。」

だから俺は、いろんな意味で変わらなければいけない。

「うん・・・そうだね」

この子を、もう二度と泣かせない為に。

そして、《この下》で眠る“あいつ”為に。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・

俺はあの時、無我夢中だった。

普段、優柔不断で頼りない俺がこの時だけは体が動いたんだ。

それは素直に、智瀬を守りたいと思ったから。

それだけの思いだけど、たったそれだけで体って動くものなんだな。

気がつけば、俺は智瀬に矛先が突き刺さる寸前で智瀬の目の前に飛び出していた。

「?!」

いきなりの行動に驚いたのか、夏美はナイフの軌道を変えて間一髪俺には当たらなかった。

「お兄ちゃん？ 何してるの？ 危ないよ？」

無垢な子供のように、本当に分からないような顔をしていた。

どうして？ 本当にそう思っているような。

「もう辞めてくれないか、夏美」

「なんで？ だってこの女が悪いんだよ？」

あたしとお兄ちゃんの間を邪魔するから、当然のことでしょ？」

何が悪いの？ 夏美の瞳はそう訴えていた。

「俺が好きなのは、智瀬なんだ」

「……え、またそんな冗談言つて。あたしを驚かそうとか？」

「嘘じゃない。これが俺の本当の気持ちなんだ」

「……嘘だよな？　だつてお兄ちゃんはキスしてくれたよ？」

それって、普通の妹にはしないはずだよな？

女の子としてみてくれてた証拠だよな???

「ごめん、あの時の俺はどうかしてたんだ」

「……」

「俺はやっぱりお前のこと、妹として好きだ。」

これからも兄妹として仲良くしたいと思っている。

だから、こんなこともう辞めよ？　普通の前みたいな関係に。」

「約束、してくれたじゃん」

「え?」

「あたしを必要としてくれるって！」

ずっと、ずうっと傍に居てくれるって言ったじゃん！！

この女が居たら、あたしの居場所なんかないじゃん！！

お兄ちゃんの傍になんか、居られなくなっちゃうじゃない？！」「

興奮したのか、声を荒げる夏美。

「だから、妹としてなら・・・」

「それじゃあたしが嫌なの！！」

お兄ちゃんと、ずっとずっと寄り添っていたいの！！」「

デパートで買ってもらえない玩具を欲し、駄々をこねている子供のようだよ。」

「.....」

「お兄ちゃん.....どうしてもその女がいいの？」「



「ああ、俺は智瀬が好きなんだ。」

お前が何を言おうと、この気持ちは変わらない。」

「ふ……」一瞬、夏美の体がビクツと動いたかと思うと

今まで俺を見つめていた瞳とは違う

先程智瀬に向けられていたのと同じ瞳を俺にも向けた。

「なら……消えちゃえ」

「え？」

「あたしのモノにならないんだったら……お兄ちゃん、消えちゃえ」

ナイフをグッと握り締め直す夏美。

「・・・!?」

俺はその禍々しいほどに濁った瞳に恐怖を覚え、鳥肌が立った。

## 最終章Cパート

その夏美の言葉は、俺に突き刺さる視線は冷たいものだった。

怖いくらいに。

「ちょっと待てよ、どうしちゃったんだよ？ 夏美？」

「消えちゃえ・・・消えちゃえ・・・うふふ」

「夏美・・・？」

「お兄ちゃんなんか、もう要らない。 あの女の恋人（んこ）になるくらいなら。」

お兄ちゃんなんか、要らない。」

「・・・」

「だからあ  
「・・・」

スウッと刃の矛先を俺に向けた。

「消えて」

にっこり笑うとダッと刃を向けたまま俺に駆け寄ってくる。

。。。。。。

そこからの光景は、スローモーションのように見えた。

矛先で確かめる。夏美が狙っているであろう場所、俺の心臓。

ああ、こいつは俺のことを本気でやるつもりなんだな。

でも、これもそれも全部俺が招いたことなんだ。

謂わば自業自得。 覚悟しなきゃいけないんだな。

駆け寄ってくる夏美を、俺はそのまま抱きとめてやる気持ちでその



「?!」 夏美はその足を止めた。

また俺も、予想外の展開に目を白黒させていた。

「なんでそうなるの?!」

智瀬は泣き、嗚咽を漏らしながら夏美を睨みつけた。

顔は涙と鼻水と、

悲しみ・恐怖・不安・後悔等様々な感情で歪み、汚れきっていた。

見ている、胸が締め付けられてしまうほどに。

「なんでって、あんたは黙ってて。」

そもそも、あんたの所為なんだからね？

あんたさえ居なければお兄ちゃんはきつとあたしを選んだ!」

「なら私をコロせばいいじゃない!

なんでさと君がコロされなきゃいけないのよ!」

「だって嫌なんだもん！！ このままお兄ちゃんが遠くにいつちやうと思つと……。」

ずっと近くに居たいんだもん！！ 寄り添って居たいんだもん！！

キスとか……もつともつといやらしい事……したいんだもん  
！！！！」

「夏美ちゃん……。」

「でも、あんたが居たらダメなの！！

お兄ちゃんはあんたしか見てないの！！ あたしの事は妹として  
しか……。」

俯き、その頬からは涙がこぼれていた。

夏美の気持ちに呼応したかのように、暗く深い藍色をしていた

空が濼<sup>よど</sup>み始める。

「夏美ちゃん……私はさと君を譲ることは、できないよ」

「ほらやっぱり、あたしからお兄ちゃんを取るんじゃない！！」

「聞いて、夏美ちゃん。」

確かに私は恋人の席は譲らないと言っただけ。

貴方は、妹っていう立派にさと君の隣に居る権利を持つてる」

「は……？ 意味分かんない……妹がなんで傍に居るとかなるの……？」

「私は、恋人になれても妹にはなれない。

もし万が一、何かあってさと君と別れてしまったら。

私はもうさと君の元を離れるしかない。」

「……」

「でも、貴方は違うじゃない。何かあっても、妹として家族として

さと君との絆は切れることはないわ。

悔しいけど、そういう意味では貴方の方がずっと傍に居られるの。」

智瀬の言つとおりかもしれない。 智瀬とは別れてしまえば赤の他人。



でも、夏美とは何があっても家族ということには変わらない。

今、こんなことがあっても俺は夏美を妹だと思っている。

家族としてでいいのなら、いくらでも愛してやれる自信がある。

皮肉な事だ。こんなことにならなきゃ、そんなことも分からないなんて。

「何それ・・・意味分かんない・・・」

そう言う夏美の言葉には、もう先程の覇気は感じられなかった。

「分かって、夏美ちゃん。」

私は貴方とこんなことになりたいんじゃない。

確かに、正直に言うとな貴方が邪魔だと思ってた時もあった。

でも、今夏美ちゃんの気持ちを聞いて分かったの。

私と貴方は同じなんだって。」

「同じ・・・?」

「普段強がつてるけど、本当は弱くて、泣き虫で肝心な時に言いた  
い事」

「言えなくて……こうなってしまつまで、溜め込んでしまつと」。

「

「……。。　ひとつだけ、違うところがあるよ。先輩。」

「え？」

「あたしは、普段からお兄ちゃんに自分の気持ちをアピールしてき  
たつもり。」

「でも、お兄ちゃんは知ってか知らずか結局中々相手にしてもらえ  
なくて。」

「妹、たったそれだけでお兄ちゃんに近づけなくなっちゃってた。」

「……。。。」

「そこが、あたしと先輩の大きな違い“です”」

夏美の口調が変わった。

今の智瀬との会話で、何か心境の変化でもあったのだろうか。

「そうか・・・あたし夢を見ていたんだ・・・」

夏美は黒く、今にも泣き出しそうな夜空を見上げた。

夢を見ていた。　そう再度呟いて再び涙を流した。

「・・・・・・・・」　どう声をかけていいか分からず俺と智瀬は

ただ、そんな夏美を見つめることしかできなかった。

夜空は、今も尚、澱み続けている・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7829s/>

---

兄妹 ~ 紡グ言ノ葉 ~

2011年9月2日14時22分発行